

K-872

# 下小松古墳群 (5)

2003

川西町教育委員会

# 下小松古墳群 (5)

2 0 0 3

川西町教育委員会

## 序

「緑と愛と丘のあるまち」川西町の「丘」の部分は、現在、町の木でもある赤松が茂る典型的な里山です。ここは、はるか古代から現代にいたるまで、この地に暮らす人々の生活と密接に結びついてきた場所でした。とりわけ古墳時代には、多くの墳墓が造られていたことが知られるようになり、近年には、「下小松古墳群」と呼ばれるようになりました。平成12年には、この遺跡の大部分が、それまでの発掘調査の成果をもとに、国指定史跡に指定されています。

一方で、平成11年には、開発工事に伴う事前調査によって、これまで古墳分布の範囲外としていた場所で古墳が発見され、再度古墳の分布範囲を確定する必要性が生じました。

この本は、平成12年度から平成14年度までの3年間、国庫補助を得て実施した、下小松古墳群の範囲確認調査の報告書です。この調査により、下小松古墳群は従来よりも北に大きく広がり、墳墓が造営され始めた年代も、古墳時代の非常に早い段階にまでさかのぼることが確認されています。

この成果が、今後、埋蔵文化財の保護と、文化財保護思想の普及に大きく寄与できることを期待します。最後になりますが、調査にご協力いただいた多くの方に、心より感謝を申し上げます。

平成15年3月

川西町教育委員会

教育長 平塚紀男

## 例 言

1 本書は、平成12年度から平成14年度にかけて文化庁の国庫補助（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て実施した町内発掘調査事業の報告書である。

2 調査は下記の体制により川西町教育委員会が実施した。

調査主体	川西町教育委員会			
調査指導	小林 三郎（明治大学教授）	新井 悟（明治大学非常勤講師）		
調査担当	齊藤 敏明（川西町教育委員会）			
調査補助	澤田 悠介	時信 武史	伝田 郁夫（以上明治大学大学院）	
	佐野 恒平	業田 智行（以上東北芸術工科大学学生）		
調査参加者	佐藤 元希	渡辺 淑恵	菅野 麻子	市川 佐織
	竹内 美希	當麻 彩	五十嵐祐介	根本 岳史
	松原 礼和	遠藤 真允	安達 克典	小方 圭子
	栗田 竹二	佐藤 要蔵	金田 シヅ	竹田 きえ
	鈴木 信子	石田 菊子	金子 三次	江口 正志
	島貫 忠	島貫栄四郎	高橋 啓一	金子 正八
	山田 幹雄	細谷 良助	水見 宇一	高橋 貞夫
	山田 広一	鈴木 一	早坂喜代子	多田 太吉
	新野富太郎	川崎 純幸	須貝 文夫	小松 仁
	本田 貞雄			
業務委託	社団法人東置賜シルバー人材センター アジア航測株式会社 有限会社米川測量設計事務所			

3 次の各氏からは貴重なご指導・ご助言を得た。記して感謝したい。

北野 博司	荒木 志伸	川崎 利夫	吉野 一郎
角田 朋行	茨木 光裕	古屋 紀之	菊地 芳朗
黒沢 浩	佐藤 庄一	青山 博樹	齋藤 主税
三上 善孝	辻 秀人	中村 五郎	石川日出志（順不同）

4 本書の編集は、齊藤敏明が担当した。



## 目 次

1 調査の概要	7
2 遺跡の環境	8
3 陣が峰地区の調査	10
(1) 測量調査	10
①立地と現況	10
②調査方法	10
③調査成果	10
(2) 発掘調査	12
①調査方法	12
②調査成果	12
(3) 出土遺物	29
(4) まとめ	29
4 永松寺地区の調査	31
(1) 測量調査	31
①立地と現況	31
②調査方法	31
③調査成果	34
(2) 発掘調査	34
①調査方法	34
②調査成果	36
(3) まとめ	38
5 尼が沢地区の調査	39
(1) 測量調査	39
①立地と現況	39
②調査方法	39
③調査成果	41
(2) 発掘調査	41

①調査方法	41
②調査成果	43
(3) まとめ	46

報告書抄録	49
-------	----

## 挿 図 目 次

第1図 下小松古墳群位置図	9
第2図 陣が峰地区測量図	11
第3図 陣が峰地区トレンチ配置図・墳丘復原図	13
第4図 陣が峰地区調査区断面図 (1)	17~18
第5図 陣が峰地区調査区断面図 (2)	19
第6図 陣が峰地区調査区断面図 (3)	21~22
第7図 陣が峰地区調査区断面図 (4)	23~24
第8図 陣が峰地区調査区断面図 (5)	25
第9図 陣が峰地区調査区断面図 (6)	26
第10図 J-1号墳主体部平面図	27
第11図 J-1号墳主体部断面図	28
第12図 出土土師器実測図	30
第13図 E-5・E-6・E-7号墳測量図	32
第14図 E-8号墳測量図	33
第15図 E-5・E-6・E-7号墳調査区配置図・断面図	35
第16図 E-8号墳調査区配置図・断面図	37
第17図 尼ヶ沢土壇測量図	40
第18図 尼ヶ沢土壇調査区配置図	42
第19図 尼ヶ沢土壇調査区断面図 (1)	44
第20図 尼ヶ沢土壇調査区断面図 (2)	45
第21図 下小松古墳群古墳分布図	47~48

# 1 調査の概要

下小松古墳群は、山形県東置賜郡川西町大字下小松に所在する遺跡で、その一部は平成12年9月21日に国指定史跡となっている。ここで報告するのは平成12年度より3ヵ年の計画で文化庁の国庫補助（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て実施した町内遺跡発掘調査事業による調査である。この事業実施の経過についてまとめておきたい。

川西町では昭和58年より下小松古墳群の調査を継続して実施してきた。平成11年にはそれまでの調査の成果をもとに、薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群の3支群179基の古墳を国指定史跡とするための手続きを行った。一方、これとほぼ時を同じくして実施していた、3支群に隣接する箇所での緊急発掘調査によって、それまで知られていなかった3基の古墳が発見され、古墳の分布範囲が3支群よりも広範囲にまたがることが判った。これを受けて、この年の秋に史跡範囲外における古墳の分布調査を実施し、緊急調査で確認された古墳を含めて、さらに3つの小地域にまとまる小丘の存在が確認された。この結果によって、将来の史跡追加指定を視野に入れた古墳の分布範囲を確定するため、新たに発見された小丘の歴史的な性格を把握するための発掘調査を実施する必要性が生じ、小地域1箇所1ヵ年、合わせて3ヵ年間の計画で北から南へ向けて確認調査を行うことにしたものである。

平成12年度の調査は、最も北に位置する陣が峰と呼ぶグループについて実施した。調査期間は4月24日から7月19日である。このグループは、調査により前方後方墳1基、墳形未確定墳2基からなることが判明し、下小松古墳群に陣が峰支群として位置付けが可能となった。

翌年の13年度は、永松寺と呼ぶグループについて調査を実施した。このグループには、平成11年度の緊急発掘調査によって1基の円墳と2基の方墳が確認されていたが、残りの小丘については、5月14日から6月28日までと11月8日から11月22日までの2期にわたって調査を行った。調査の結果、先に緊急発掘調査で確認されていた3基を除いて、古墳時代の墳墓と積極的に確認できる小丘は認められなかったが、一部に古墳の可能性を残すものとした。

最終年度である14年度は、史跡範囲の南側に分布する、尼が沢と呼ぶグループについて調査を行った。現地調査は10月8日から12月3日までで、その後補足の測量を行った。この調査では県指定史跡の尼ヶ沢土壇の測量と発掘を中心に実施したが、この土壇を古墳時代の所産とする積極的な根拠は乏しく、尼が沢のグループについては、古墳群の一部に位置付けるのは難しいとの結論に至った。

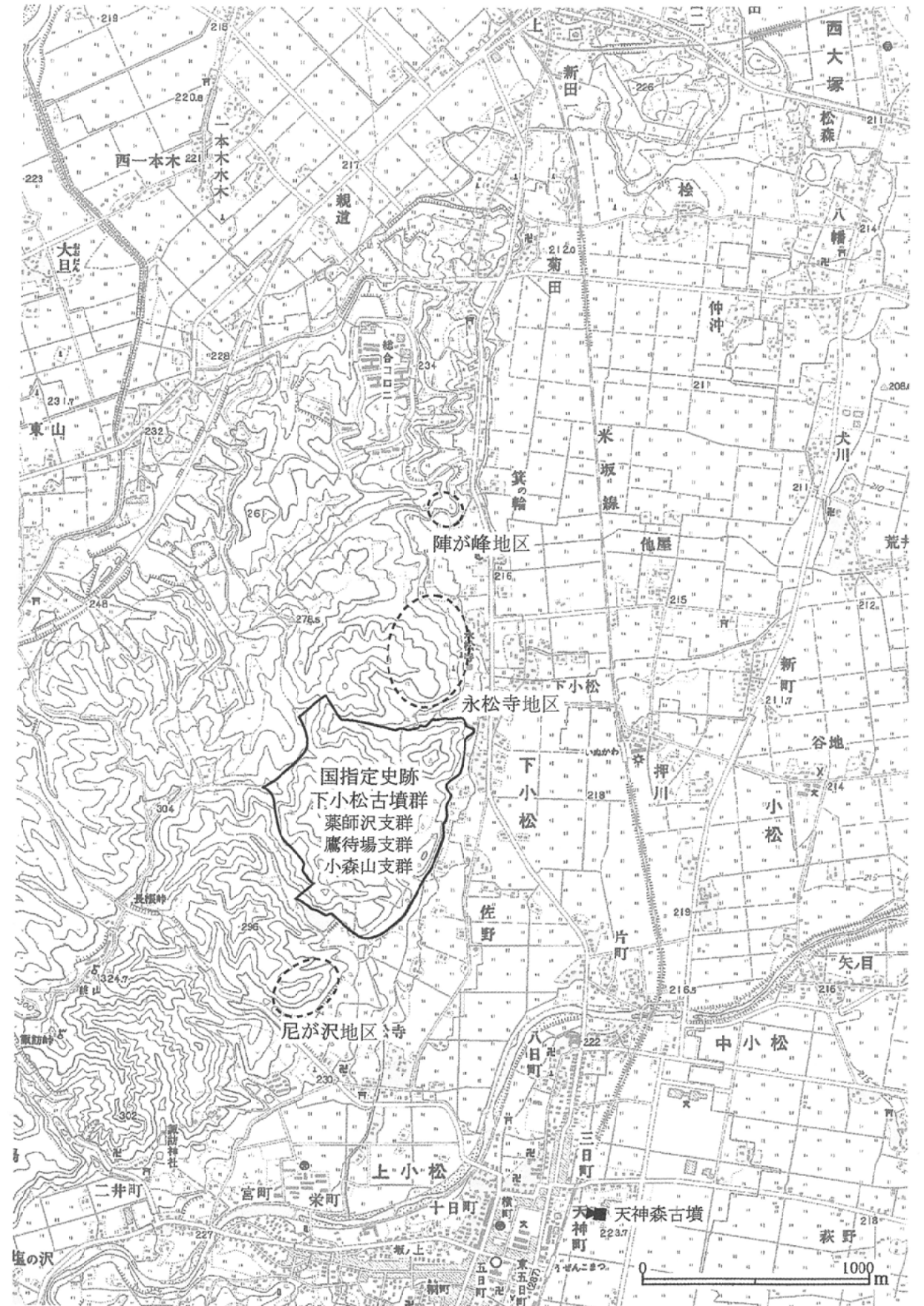
## 2 遺跡の環境

山形県の南部に位置する置賜盆地は、周囲を吾妻・飯豊・朝日の2,000 m前後の山岳と奥羽山脈、白鷹丘陵に囲まれた盆地で、吾妻山系より発する最上川（松川）により発達した東半を米沢盆地、飯豊山系より流れる白川により発達した西半を長井盆地としばしば呼び分ける。米沢盆地は、南北約20 km、東西約13 kmの倒立卵形の平面形態をした盆地で、平坦面の標高は南部でおよそ300 m、北部ではおよそ200 mを測る。

下小松古墳群は、盆地南部の山岳地帯から派生する玉庭丘陵の北端、最上川（松川）と白川の分水嶺となる通称眺山丘陵の東面に分布する古墳群である。

米沢盆地では、近年になって多くの古墳時代遺跡が調査され、当時の汎日本列島規模の社会動向と同様の歩みを進んできたことが明らかになってきた。

古墳の築造状況を概観しておきたい。米沢盆地周辺では、前期の早い時期、盆地を囲む低丘陵上に、南陽市蒲生田山古墳群、米沢市横山古墳、に加え、下小松古墳群の陣が峰支群、永松寺支群など、方形を基調とする小規模な古墳が築かれたことが明らかになってきた。これに続き、川西町天神森古墳（前方後方墳・75 m）、南陽市稲荷森古墳（前方後円墳・96 m）、米沢市成島1号墳（前方後円墳・60 m）のやや規模の大きな前方後円（方）墳が築造される。天神森古墳、稲荷森古墳は盆地平坦面に、成島1号墳は低丘陵上に築かれた古墳である。古墳の造成は、稲荷森古墳の築造の後、大きな転換が訪れる。しばらくの古墳築造数低減期を経て、中期の後半になると群集墳の築造が開始される。下小松古墳群では鷹待場支群、薬師沢支群が盛期を迎えた後、築造の中心は小森山支群へと移る。これとともに、小森山で17基の前方後円墳が継続して造られたことが判っている。ほかでも、米沢市戸塚山古墳群山頂支群、南陽市経塚山古墳群・竜樹山古墳群・天王山古墳群、長井市河井山古墳群などがある。また、南陽市の松沢古墳群は、合掌型石室を持つ古墳として注目される。この後、終末期の古墳が盆地東部で、横穴式石室を持つ古墳が盛んに造られつづけ、その傾向は8世紀になっても続くものと考えられている。



第1図 下小松古墳群位置図 (S=1/25,000)

### 3 陣が峰地区の調査

#### (1) 測量調査

##### ①立地と現況

陣が峰地区は、J-1・J-2・J-3号墳の3基からなる支群である。この地区は、南から延びる丘陵の北端に近く、主稜線から東に延びる小尾根の先端の標高約230mに位置する。周囲の丘陵の傾斜は非常に緩く、水田面との比高差は約15mである。

現況は松林となっており、墳丘は下草を刈った状態であれば視認することができた。また、J-1号墳の北と東の裾には周溝が巡るであろうことも視覚的に確認できた。周辺の聞き取りでは、この個所で過去に大きな地形改変は行われていないとされ、調査前の観察では、J-1号墳の一部が用水路の敷設に際して削られているほかは良好に遺存しているものと考えられた。

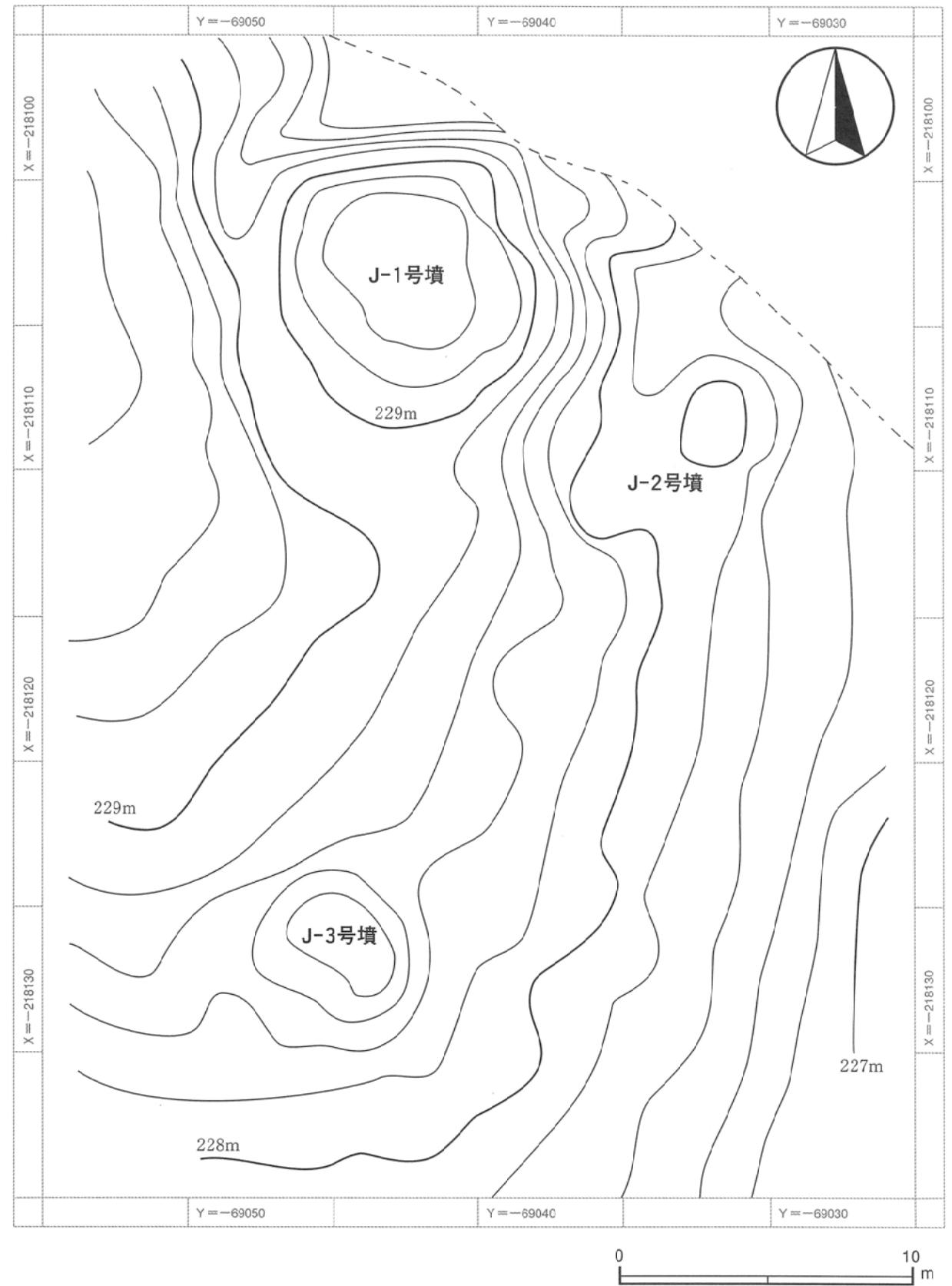
##### ②調査方法

測量に先立ち、付近の三等三角点を用いて基準点の設置を行い、古墳の分布範囲に日本平面直角座標軸に適合した5m間隔のメッシュを設定した。これを用いておよそ1,200m<sup>2</sup>の範囲を平板で測量し、絶対標高による20cm間隔の等高線を記入した1/100の平面図を作成した。

##### ③調査成果

調査結果を縮小したものが第2図である。J-1号墳は、墳頂部最高点の標高が229.7mを示す。墳丘北面から西面にかけての直線的なラインが明瞭に観察でき、主丘が方形を呈することを示している。一方、視覚的に判然としなかった前方部については、測量図によっても228.4mの等高線がわずかに前方部前端のコーナーを示しているに過ぎない。とくに西側はくぶれ部も明瞭でない。この結果だけでJ-1号墳を前方後方墳とするには心許ない結果であった。J-2号墳・J-3号墳については、小規模ながらも自然地形とは異なる高まりが測量図に反映されている。それぞれの最高点はJ-2号墳が228.2m、J-3号墳が228.9mである。

なお、測量図に見られるJ-1号墳後方部の東に延びる尾根上の高まりは後世の客土であることが、削平された箇所断面観察によって判っている。



第2図 陣が峰地区測量図 (S = 1/200)



## (2) 発掘調査

### ①調査方法

発掘調査は、墳丘の歴史的 성격の確認という調査目的から、トレンチによる部分的な発掘方法を採用した。調査区（トレンチ）の設定に際しては測量時に設定した5m四方のメッシュを基準として周囲の立ち木等を考慮し、アルファベットのaからnまでの順次14箇所のトレンチとJ-1号墳の墳頂調査区、最終的に合わせて15箇所を設定した。発掘調査面積は合わせて約107.5m<sup>2</sup>である（第3図）。

また、発掘調査前に、J-1号墳後方部北側の削平面の断面観察を行い、断面がU字形をなす周溝が存在すること・地山上には盛土が施されていることを確認している。

### ②調査成果

#### 《J-1号墳》

##### 墳丘

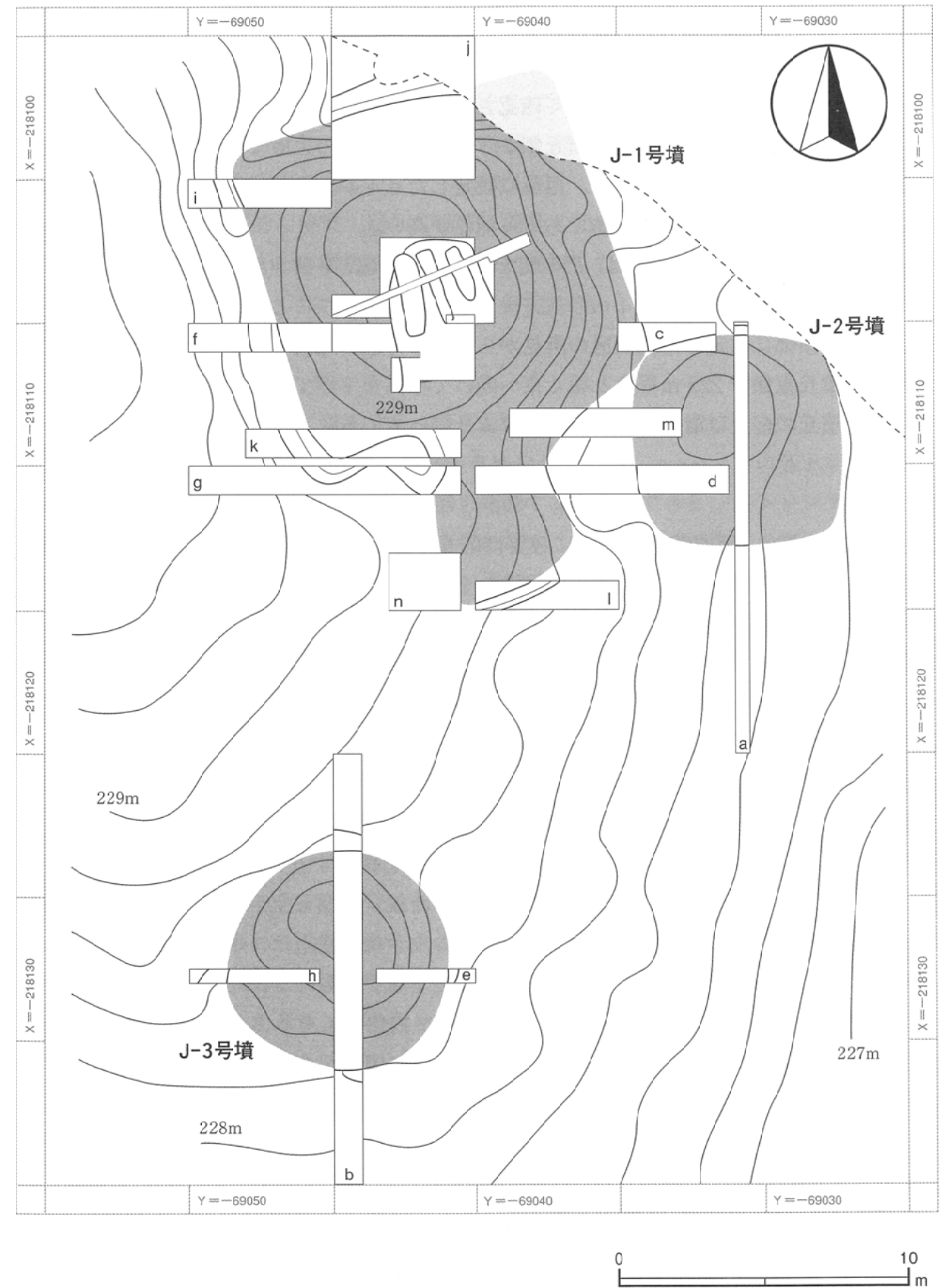
J-1号墳の墳丘各部について、トレンチでの発掘状況によって見ていく。

主丘である後方部は、jトレンチで北面が確認されている。墳丘は周溝によって自然地形と切り離されており、周溝の上端の幅は約1.4m、現地表面からの深さは約0.7mである。周溝の断面はU字形で、墳丘側だけでなく自然地形側の立ちあがりも傾斜はきつい。平面は直線的で発掘前の等高線をよく反映している。

後方部の西面は、f・i・kの3本のトレンチによっておおよその様子がわかる。3本のトレンチそれぞれで断面U字形の溝が確認されており、北側と同様、墳丘は周溝によって自然地形と切り離されている。上端の幅約1.8m、深さ0.8mである。3本のトレンチで確認された溝はほぼ一直線に位置し、jトレンチで確認された北面の周溝とはおよそ90度のコーナーを形成すると思われる。主丘を方形と判断した主要な根拠である。

東面はcトレンチと後方部北東の断面が調査されている。削平面の断面ではU字形の溝が確認されている。また、cトレンチではJ-1号墳の崩落土とJ-2号墳の崩落土が部分的に切り合う。時間的には、J-1号墳の築造後、これに裾を接するようにJ-2号墳が築造されているようである。

東西のくびれ部にはk・g・m・dの4トレンチを設定した。西側のくびれ部にあたるk・gのトレンチでは、平面がS字形をなす溝が確認された。kトレンチで確認された溝は、gトレンチでやや丸みを持ちながらほぼ90度に曲がり、後方部南東のコーナーを形成する。さらに、くびれ部で前方部側へ開き、ここで幅、深さとも急速に減じて収束する。



第3図 陣が峰地区トレンチ配置図・墳丘復原図 (S = 1/200)



一方の東側はm・dの両トレンチともに溝は確認されなかった。dトレンチでは墳丘裾に明確な傾斜の変換するラインを見て取ることができ、前方部における墳丘裾を決定できるが、mトレンチではその変化は緩やかで曖昧である。

前方部前端は、lトレンチによって確認されている。幅約0.6m、深さ約0.2mのごく浅い溝が東西方向に走る。覆土は墳丘側から流れた暗褐色の土層で、土師器を包含するため、墳丘築造に伴う溝と判断した。西隣に設定したnトレンチでは溝の続きは検出されず、前方部の前端を区画するための溝である可能性が高い。

以上のことから、J-1号墳は、東南側を除いた後方部と、前方部の前端に溝を巡らした主軸長17.8m、後方部幅12.4mの前方後方形の墳丘を持つことが明らかになった。

また、墳頂部に設定した調査区の所見から、この付近の地山レベルは、墳丘西側で229m程度、墳丘東側で228m程度と緩く東へ向けて標高を下げていることを想定することができる。墳丘の盛土は最大で約0.9mの厚みを持っている。

#### 主体部

J-1号墳では、後方部の平坦面に必要に応じて拡張しながら設定した調査区の発掘によって3基の主体部と考えられる平面プランを確認した(第10図)。

確認面は、墳頂平坦面の表土下約0.2m、標高約229.2mである。墳丘の主軸上に1号主体部、その東に2号主体部、1号主体部の西に3号主体部がある。確認面での規模は、1号主体部で長軸2.64m×短軸0.4m、2号主体部で長軸1.96m×短軸0.58m、3号主体部で長軸2.88m×短軸0.8mである。3基の平面は、確認面では切り合うこともなく、その位置には規則的な印象も受ける。

これらの平面プランが主体部であるとの認識は、3基の主体部を横断するように設定したサブトレンチの発掘によるところが大きい。断面を観察すると、1号主体部は、後方部の旧表土上に約0.3mの厚さの盛土を平坦に施した後、周囲を土手状に盛り、この中央に棺を設置したものであることが想定できる。この土手状の盛土は、平面的にも確認することができているが、調査区内の所見では墳頂部を全周するものではなく、前方部側は開いたままであった可能性も残る。1号主体部の棺は、白色粘土を多く含む土で固定され、設置後にこれを覆うように土が充填されている。さらに墳頂部全体を覆う、いわゆる「化粧土」が施されて、最初の埋葬を終えている。

2号主体部は、墳頂部の化粧土を掘り込んでいることから、1号主体の埋葬終了後に掘り込まれたものであることがわかる。3号主体部は、上方から一度掘り込まれた土壌内に棺を設置したものであるが、上層との詳しい切りあい関係は不明である。ただ、平面プランの観察では、一部土手状の盛土を切り込んでいる箇所も認められている。

これら3基の主体部の関係は、1号主体部が最初に設置され、3号主体部はこれに後出するものの、2号主体部との先後関係は不明である。また、これら3基の主体部の底部には

やや粘性を持つ非常に極めの細かい土が堆積している。これまでの調査の経験から、これを木棺の腐朽によって形成された土層と考えている。

第1主体部としたプラン内からは確認面の付近で祭祀用と思われる土師器片(高杯・装飾器台・小型壺等)が多数出土している。出土レベルは、いずれも表土下0.2mから0.3mで、化粧土の下層にあたり、土手状盛土の内部を充填した後に、なんらかの祭祀儀礼が行われたとすることも可能である。

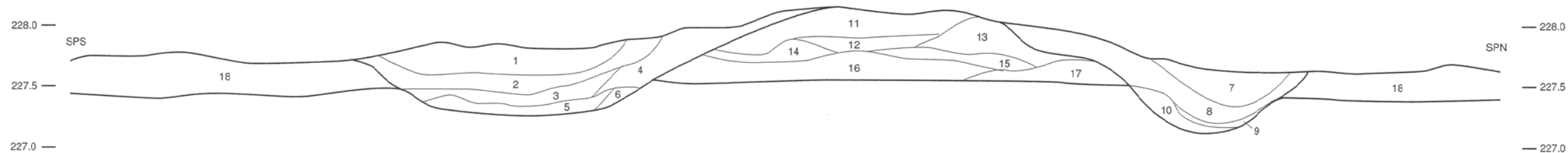
以上、プランの平面的な位置・断面の状況・遺物の出土状況の3つによって、3基のプランを埋葬主体部とし、その構造は木棺の直葬と判断した。

#### 《J-2・J-3号墳》

J-2号墳は、J-1号墳に東接する。墳丘を南北に縦断する箇所にaトレンチを設定し、必要に応じて、J-1号墳との間にトレンチを増やしている。a・c・dの各トレンチでは、地山を削りだすことで顕在化された墳丘裾を確認することができる。aトレンチの北端では対面の立ち上がりがあり断面U字形の溝状をなす。aトレンチの南側の裾と北側の裾との間の距離は7.3mである。また、cトレンチで確認された墳丘裾の平面的なラインは直線的で、かつ、dトレンチで確認された墳裾のラインを延長すると、マウンドの北西部ではやや丸みがあるものの、コーナーを持つ平面形態が想定できる。このことを理由にJ-2号墳は方墳であると考えている。

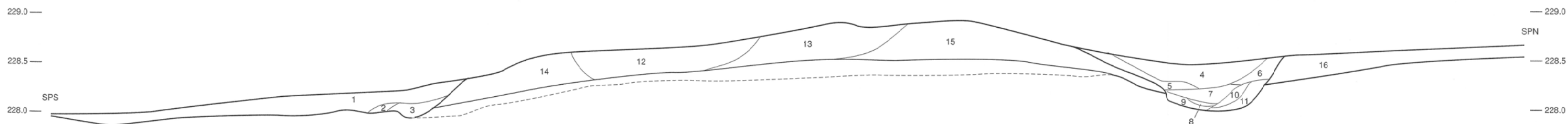
なお、J-2号墳の主体部は、関係する4本のトレンチの所見からは、その明確な痕跡を確認することはできていない。

J-3号墳は、J-1の南、前方部前端から10m程の間隔を空けた箇所に位置する。高まりを縦断するようにbトレンチを、これに直交するようにe・hのトレンチを設定した。bトレンチでは、墳丘の北で明瞭な立ち上がりを持つ断面U字形の溝が確認でき、南でもこれに対応すると思われる溝が認められる。この裾間の距離は7.6mである。また、e・hのトレンチでも墳丘裾が確認でき、この裾間の距離も7.6mである。なお、墳形と主体部については、設定したトレンチの所見からでは判断することができなかった。



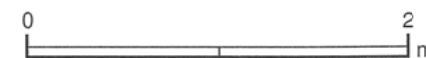
a トレンチ西壁断面図

- |          |         |             |               |         |         |      |               |
|----------|---------|-------------|---------------|---------|---------|------|---------------|
| 1 暗褐色土層  | しまり強い   | 粘性ややあり      | 11 明褐色土層      | しまりあり   | 粘性弱い    |      |               |
| 2 褐色土層   | しまり強い   | 粘性ややあり      | 12 褐色土層       | しまりあり   | 粘性弱い    |      |               |
| 3 赤褐色土層  | しまりあり   | 粘性あり        | 13 褐色土層       | しまりやや緩い | 粘性弱い    |      |               |
| 4 暗赤褐色土層 | しまりあり   | 粘性あり        | 14 褐色土層       | しまりやや緩い | 粘性あり    |      |               |
| 5 暗褐色土層  | しまりやや緩い | 粘性ややあり      | 赤褐色土がブロック状に混入 | 15 褐色土層 | しまりやや緩い | 粘性弱い | ごく細かい炭化材を少量含む |
| 6 暗褐色土層  | しまりやや緩い | 粘性ややあり      | 16 暗赤褐色土層     | しまりやや緩い | 粘性ややあり  |      |               |
| 7 褐色土層   | しまりやや緩い |             | 17 暗赤褐色土層     | しまりややあり | 粘性ややあり  |      |               |
| 8 赤褐色土層  | しまりあり   | 粘性弱い        | 18 褐色土層       | しまりあり   | 粘性弱い    |      |               |
| 9 暗褐色土層  | しまりやや緩い | ごく細かい炭化粒を含む | 19 黄白色土層      | 地山      |         |      |               |
| 10 褐色土層  | しまりやや緩い | 粘性ややあり      |               |         |         |      |               |

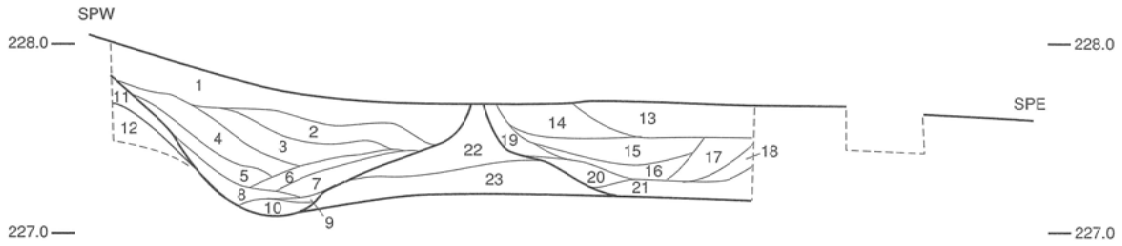


b トレンチ西壁断面図

- |          |         |        |           |          |        |      |
|----------|---------|--------|-----------|----------|--------|------|
| 1 明黄褐色土層 | しまりやや緩い | 粘性ややあり | 9 赤褐色土層   | しまり強い    | 粘性ややあり |      |
| 2 明褐色土層  | しまりやや緩い | 粘性弱い   | 10 暗褐色土層  | しまり強い    | 粘性ややあり |      |
| 3 暗褐色土層  | しまり緩い   | 粘性ややあり | 炭化物を少量含む  | 11 明褐色土層 | しまり強い  | 粘性あり |
| 4 褐色土層   | しまりややあり | 粘性弱い   | 12 黄褐色土層  | しまりややあり  | 粘性弱い   |      |
| 5 赤褐色土層  | しまりあり   | 粘性やや弱い | 13 褐色土層   | しまりややあり  | 粘性ややあり |      |
| 6 明褐色土層  | しまりややあり | 粘性やや弱い | 14 明赤褐色土層 | しまり弱い    | 粘性ややなし |      |
| 7 赤褐色土層  | しまりややあり | 粘性あり   | 15 明褐色土層  | しまりややあり  | 粘性ややあり |      |
| 8 赤褐色土層  | しまり強い   | 粘性あり   | 16 暗褐色土層  | しまりややあり  | 粘性やや弱い |      |

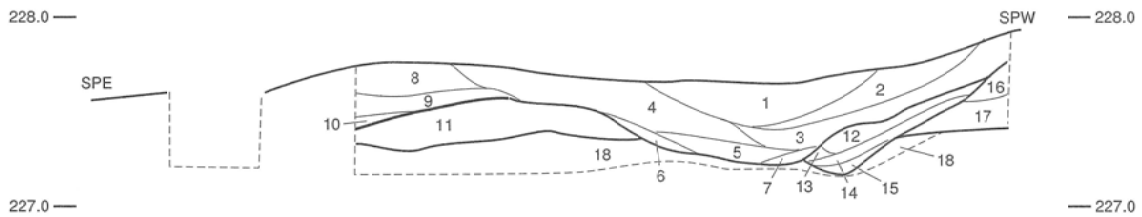


第4図 陣が峰地区調査区断面図(1) (S=1/40)



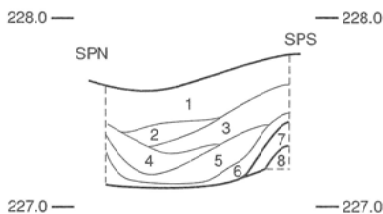
c トレンチ北壁断面図

- |           |         |        |             |
|-----------|---------|--------|-------------|
| 1 明褐色土層   | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 2 暗褐色土層   | しまりややあり | 粘性弱い   |             |
| 3 赤褐色土層   | しまり強い   | 粘性弱い   | ごく細かい炭化物を含む |
| 4 赤褐色土層   | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 5 褐色土層    | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 6 明赤褐色土層  | しまりやや強い | 粘性やや弱い |             |
| 7 暗褐色土層   | しまりやや強い | 粘性弱い   |             |
| 8 褐色土層    | しまり弱い   | 粘性ややあり |             |
| 9 黄褐色土層   | しまり強い   | 粘性ややあり |             |
| 10 黄褐色土層  | しまり強い   | 粘性あり   |             |
| 11 黄褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 12 赤褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 13 暗黄褐色土層 | しまり緩い   | 粘性弱い   |             |
| 14 黄褐色土層  | しまり緩い   | 粘性弱い   |             |
| 15 淡赤褐色土層 | しまりやや緩い | 粘性やや弱い |             |
| 16 淡赤褐色土層 | しまり強い   | 粘性あり   |             |
| 17 暗褐色土層  | しまり緩い   | 粘性やや弱い |             |
| 18 暗褐色土層  | しまりやや強い | 粘性ややあり |             |
| 19 暗褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 20 暗黄褐色土層 | しまり緩い   | 粘性弱い   |             |
| 21 暗褐色土層  | しまりやや強い | 粘性弱い   |             |
| 22 暗黄褐色土層 | しまりやや強い | 粘性やや弱い |             |
| 23 暗褐色土層  | しまりやや強い | 粘性あり   |             |



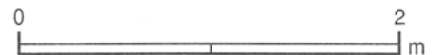
c トレンチ南壁断面図

- |           |         |        |             |
|-----------|---------|--------|-------------|
| 1 黄褐色土層   | しまり緩い   | 粘性弱い   |             |
| 2 暗褐色土層   | しまり緩い   | 粘性弱い   |             |
| 3 淡赤褐色土層  | しまりやや強い | 粘性強い   | 細かい炭化物を少量含む |
| 4 褐色土層    | しまり緩い   | 粘性ややあり |             |
| 5 暗赤褐色土層  | しまりやや強い | 粘性弱い   |             |
| 6 黄褐色土層   | しまりやや強い | 粘性あり   |             |
| 7 明黄褐色土層  | しまり強い   | 粘性ややあり |             |
| 8 暗黄褐色土層  | しまり緩い   | 粘性弱い   |             |
| 9 暗褐色土層   | しまり緩い   | 粘性あり   |             |
| 10 暗褐色土層  | しまりやや強い | 粘性弱い   |             |
| 11 黄褐色土層  | しまりやや強い | 粘性あり   |             |
| 12 赤褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 13 暗赤褐色土層 | しまり強い   | 粘性やや弱い |             |
| 14 暗赤褐色土層 | しまり強い   | 粘性ややあり |             |
| 15 赤褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   |             |
| 16 明赤褐色土層 | しまりやや強い | 粘性ややあり |             |
| 17 赤褐色土層  | しまりやや強い | 粘性弱い   |             |
| 18 赤褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   | 地山          |

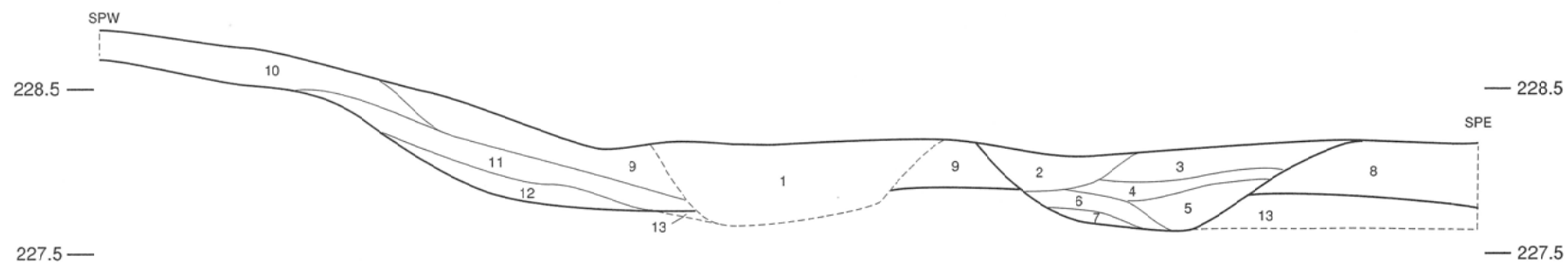


c トレンチ東壁断面図

- |          |         |        |          |
|----------|---------|--------|----------|
| 1 暗黄褐色土層 | しまり緩い   | 粘性弱い   |          |
| 2 暗褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   |          |
| 3 暗褐色土層  | しまり緩い   | 粘性強い   |          |
| 4 暗褐色土層  | しまり強い   | 粘性ややあり | 炭化物を少量含む |
| 5 暗黄褐色土層 | しまりやや強い | 粘性ややあり |          |
| 6 暗褐色土層  | しまりやや強い | 粘性弱い   |          |
| 7 黄褐色土層  | しまりやや強い | 粘性弱い   |          |
| 8 赤褐色土層  | しまり強い   | 粘性弱い   | 地山       |

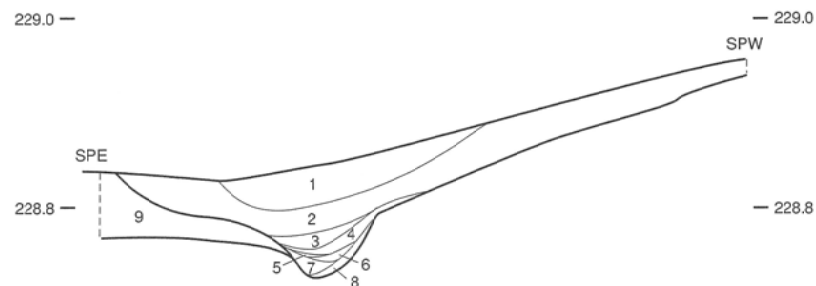


第5図 陣が峰地区調査区断面図 (2) (S = 1 / 40)



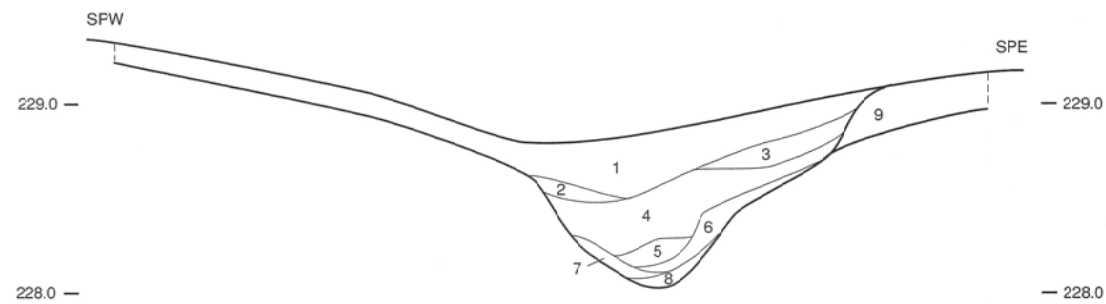
d トレンチ北壁断面図

- |                               |                                 |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1 攪乱                          | 8 茶褐色土層 しまり強い 粘性やや弱い            |
| 2 暗褐色土層 しまり弱い 粘性やや弱い          | 9 明黄褐色土層 しまり強い 粘性弱い 細かい炭化物を多く含む |
| 3 明褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり        | 10 暗黄褐色土層 しまりやや弱い 粘性あり          |
| 4 褐色土層 しまり強い 粘性ややあり           | 11 暗茶褐色土層 しまりやや弱い 粘性やや弱い        |
| 5 褐色土層 しまりやや強い 粘性あり 細かい炭化物を含む | 12 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 遺物包含層   |
| 6 褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり         | 13 地山                           |
| 7 暗黄褐色土層 しまり強い 粘性あり           |                                 |



e トレンチ南壁断面図

- |                      |
|----------------------|
| 1 褐色土層 しまり弱い 粘性弱い    |
| 2 赤褐色土層 しまり弱い 粘性やや弱い |
| 3 褐色土層 しまり強い 粘性ややあり  |
| 4 暗褐色土層 しまり強い 粘性やや弱い |
| 5 明褐色土層 しまり強い 粘性ややあり |
| 6 赤褐色土層 しまり強い 粘性あり   |
| 7 褐色土層 しまり強い 粘性あり    |
| 8 赤褐色土層 しまり強い 粘性あり   |
| 9 暗赤褐色土層 しまり強い 粘性あり  |

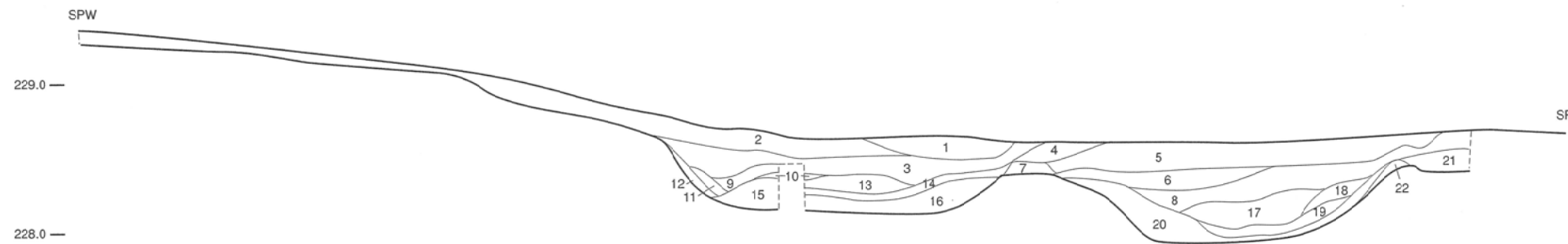


f トレンチ北壁断面図

- |                                |
|--------------------------------|
| 1 暗黄褐色土層 しまりやや強い 粘性あり 炭化物を少量含む |
| 2 暗褐色土層 しまり強い 粘性あり 炭化物を多く含む    |
| 3 暗赤褐色土層 しまり強い 粘性弱い            |
| 4 明赤褐色土層 しまり強い 粘性弱い 炭化物を少量含む   |
| 5 暗黄褐色土層 しまり弱い 粘性あり            |
| 6 明黄褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い          |
| 7 暗褐色土層 しまり強い 粘性あり 細かい炭化物を多く含む |
| 8 明赤褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い          |
| 9 赤褐色土層 しまり弱い 粘性弱い             |



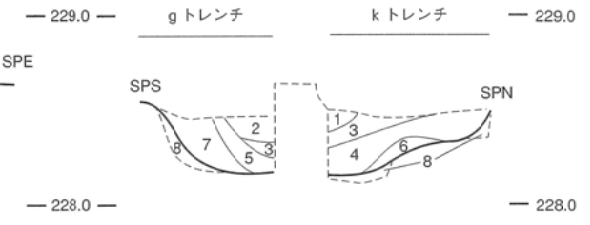
第6図 陣が峰地区調査区断面図(3) (S=1/40)



g トレンチ北壁断面図

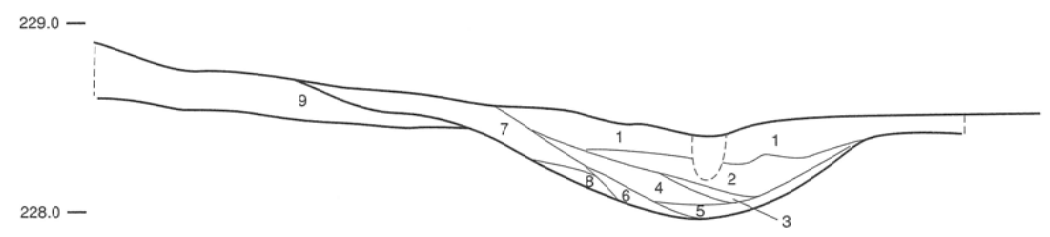
- 1 赤褐色土層 しまり緩い 粘性弱い
- 2 黄褐色土層 しまり緩い 粘性やや弱い
- 3 暗褐色土層 しまり緩い 粘性ややあり 細かい炭化物を含む
- 4 褐色土層 しまり緩い 粘性弱い
- 5 赤褐色土層 しまり緩い 粘性弱い
- 6 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 炭化物を多く含む
- 7 明褐色土層 しまり強い 粘性弱い 大きい炭化物をごく少量含む
- 8 赤褐色土層 しまりやや強い 粘性やや弱い 細かい炭化物をごく少量含む
- 9 赤褐色土層 しまり緩い 粘性ややあり
- 10 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 炭化物を含む
- 11 暗赤褐色土層 しまりやや強い 粘性あり 炭化物を含む

- 12 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性あり 炭化物を多く含む
- 13 赤褐色土層 しまり強い 粘性あり 炭化物をごく少量含む
- 14 暗褐色土層 しまりやや緩い 粘性あり 炭化物を非常に多く含む
- 15 暗赤褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり
- 16 黄褐色土層 しまり強い 粘性あり
- 17 赤褐色土層 しまり緩い 粘性やや弱い 細かい炭化物を含む
- 18 褐色土層 しまりやや緩い 粘性やや弱い 炭化物を少量含む
- 19 暗褐色土層 しまり強い 粘性ややあり 細かい炭化物を含む
- 20 明褐色土層 しまり緩い 粘性弱い
- 21 明褐色土層 しまりやや緩い 粘性あり
- 22 明褐色土層 しまりやや強い 粘性あり



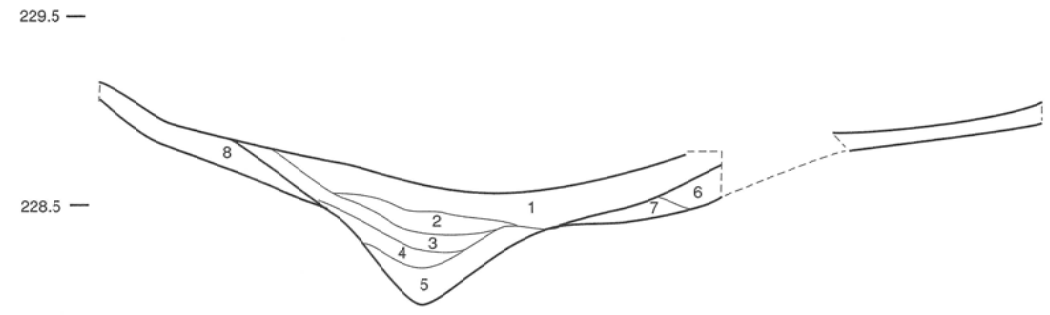
k・g トレンチ南北ベルト断面図

- 1 暗褐色土層 しまり緩い 粘性ややあり 炭化物を含む
- 2 暗赤褐色土層 炭化物を含む
- 3 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い 炭化物を多く含む
- 4 赤褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い 炭化物を少量含む
- 5 褐色土層 しまり緩い 粘性あり ごく少量の炭化物を含む
- 6 赤褐色土層 しまり緩い 粘性あり 炭化物を多く含む
- 7 褐色土層 しまり強い 粘性あり
- 8 地山



h トレンチ南壁断面図

- 1 黄褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い
- 2 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性やや弱い 炭化物を含む
- 3 暗褐色土層 しまり強い 粘性弱い
- 4 赤褐色土層 しまり強い 粘性やや弱い
- 5 明褐色土層 しまり強い 粘性ややあり
- 6 明赤褐色土層 しまり強い 粘性ややあり
- 7 褐色土層 しまりやや緩い 粘性ややあり
- 8 暗赤褐色土層 しまり強い 粘性あり
- 9 赤褐色土層 しまり強い 粘性弱い



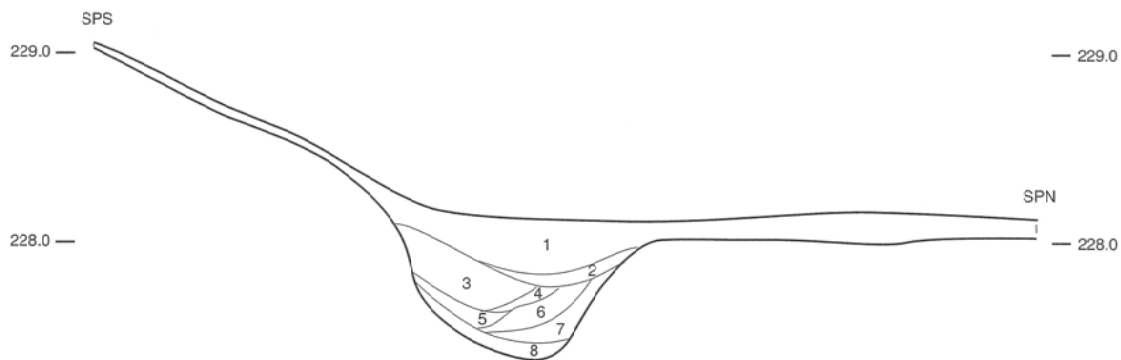
i トレンチ北壁断面図

- 1 黄褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い
- 2 暗褐色土層 しまり強い 粘性弱い
- 3 明褐色土層 しまり強い 粘性弱い
- 4 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 炭化物を含む
- 5 赤褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり
- 6 暗赤褐色土層 しまりやや強い 粘性弱い
- 7 暗赤褐色土層 しまりやや緩い 粘性ややあり
- 8 赤褐色土層 しまり強い 粘性あり



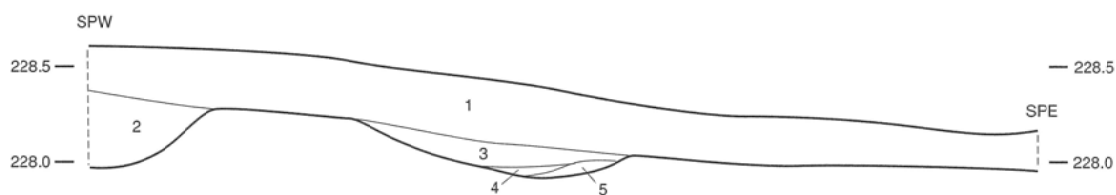
第7図 陣が峰地区調査区断面図 (4) (S = 1 / 40)





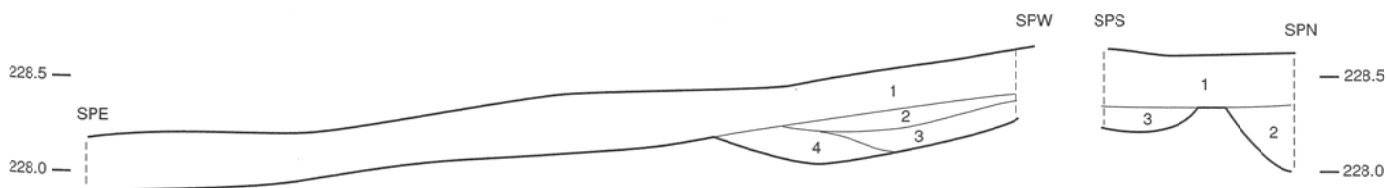
j トレンチ西壁断面図

- 1 暗褐色土層 しまり強い 粘性ややなし 細かい炭化物を多く含む
- 2 明黄褐色土層 しまり強い 粘性ややなし 細かい炭化物を含む
- 3 赤褐色土層 しまり強い 粘性ややあり
- 4 明黄褐色土層 しまりやや緩い 粘性ややあり
- 5 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 細かい炭化物を含む
- 6 暗黄褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 細かい赤色土粒を多く含む
- 7 明黄褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 細かい赤色土粒を多く含む 遺物包含層
- 8 淡赤褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり



I トレンチ北壁断面図

- 1 暗褐色土層 しまり緩い 粘性やや弱い
- 2 赤褐色土層 しまり緩い 粘性ややあり
- 3 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり 遺物包含層
- 4 赤褐色土層 しまり強い 粘性ややあり
- 5 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性あり 細かい炭化物を含む

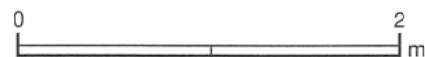


I トレンチ南壁断面図

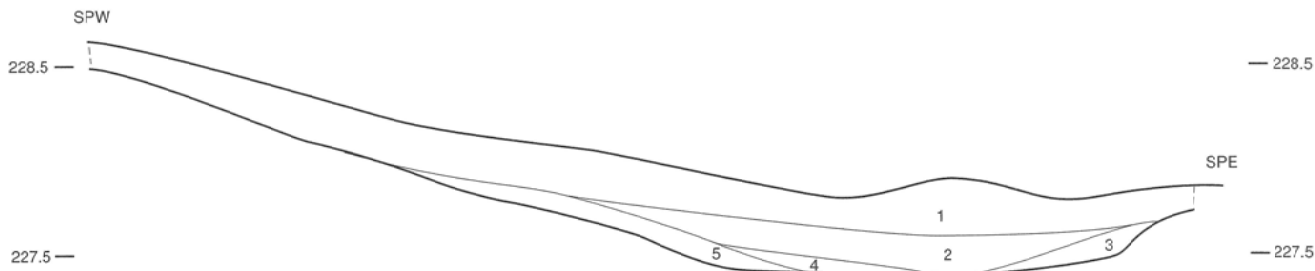
I トレンチ西壁断面図

- 1 暗褐色土層 しまり緩い 粘性やや弱い
- 2 暗褐色土層 しまり強い 粘性やや弱い 細かい炭化物を多く含む 遺物包含層
- 3 暗褐色土層 しまり強い 粘性やや弱い
- 4 褐色土層 しまりやや強い 粘性やや弱い

- 1 暗褐色土層 しまり緩い 粘性やや弱い
- 2 赤褐色土層 しまり緩い 粘性ややあり
- 3 暗褐色土層 しまり強い 粘性やや弱い

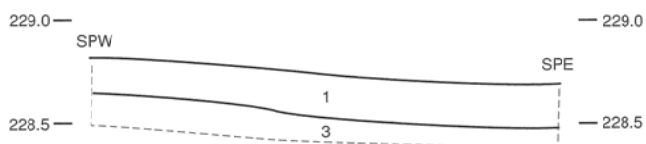


第8図 陣が峰地区調査区断面図 (5) (S = 1 / 40)

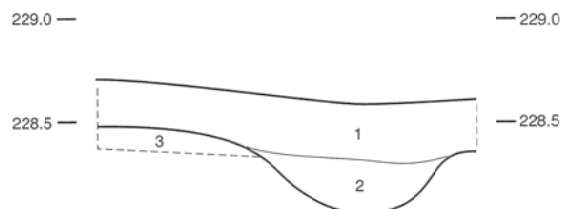


m トレンチ北壁断面図

- 1 暗黄褐色土層 しまり緩い 粘性ややあり
- 2 暗褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり
- 3 暗黄褐色土層 しまり強い 粘性ややあり
- 4 暗黄褐色土層 しまりやや強い 粘性ややあり
- 5 淡赤色土層 しまり強い 粘性ややあり

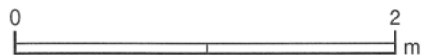


n トレンチ北壁断面図

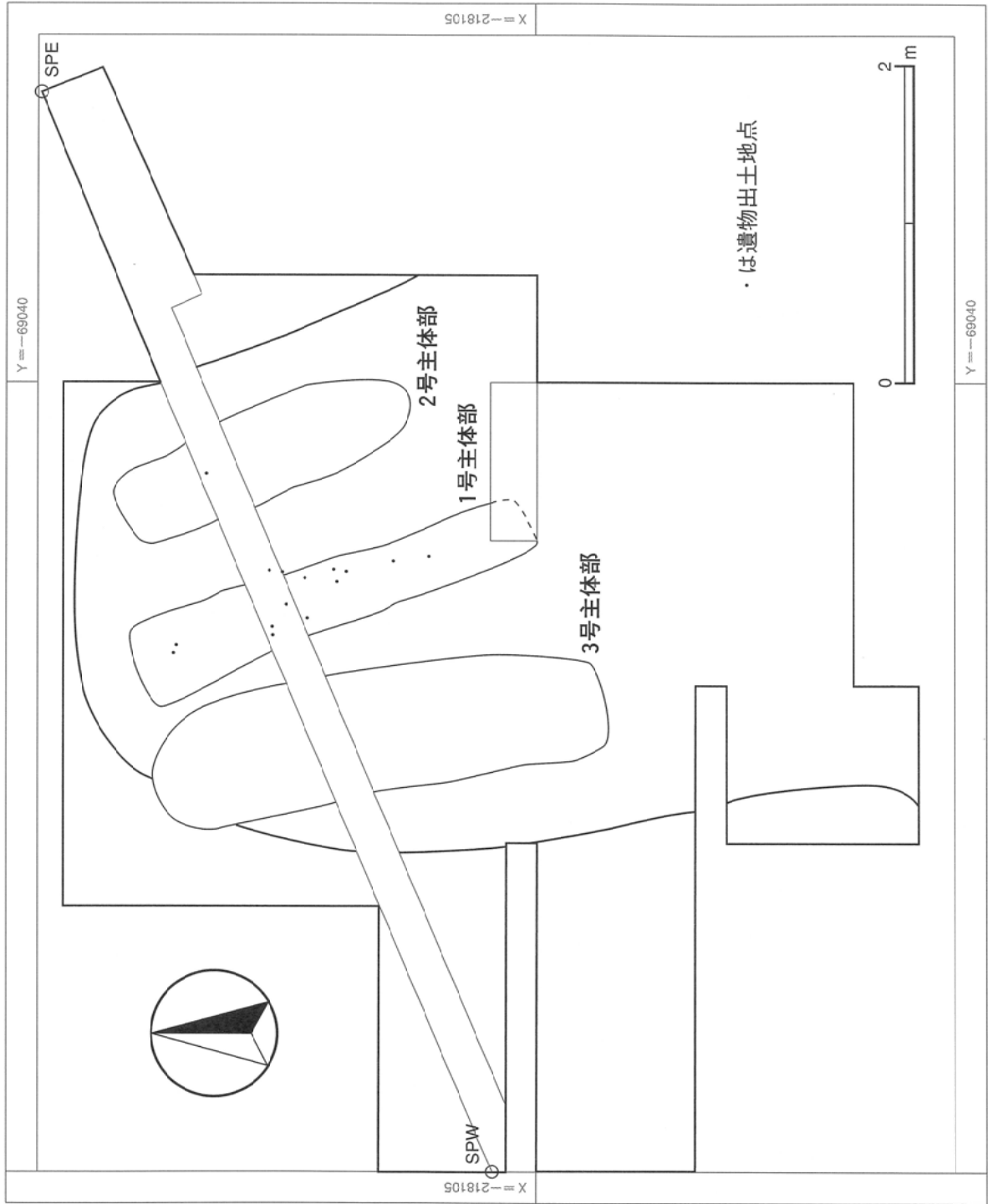


n トレンチ東壁断面図

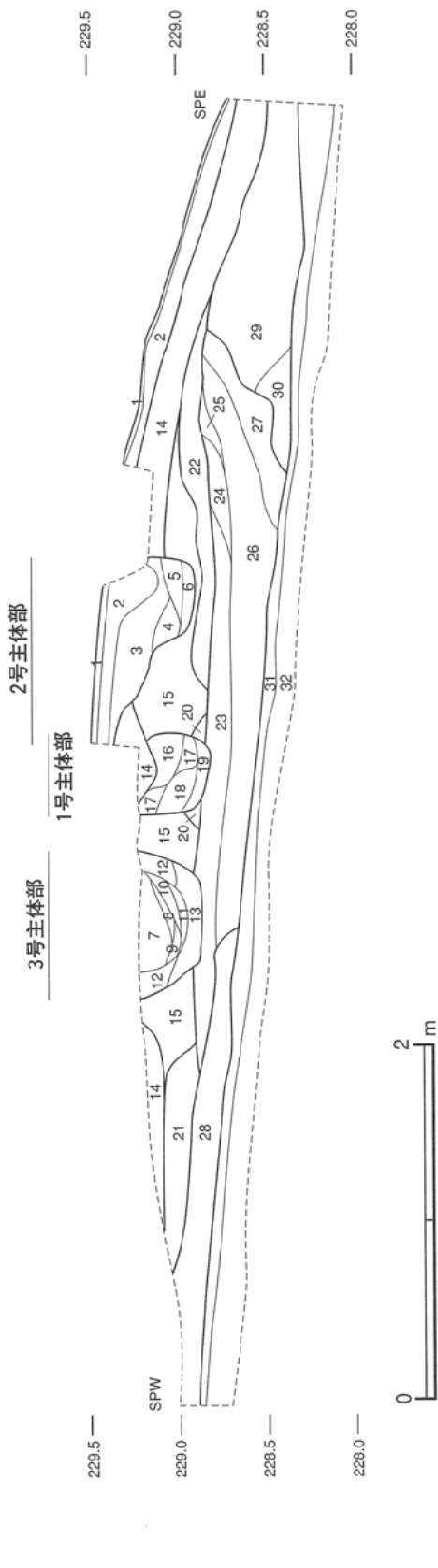
- 1 暗褐色土層 しまりやや緩い 粘性ややあり 細かい炭化物を含む 遺物包含層
- 2 赤色土層 しまりやや緩い 粘性ややあり
- 3 赤褐色土層 しまり強い 粘性弱い 地山



第9図 陣が峰地区調査区断面図(6) (S=1/40)



第10图 J-1号坑主体部平面图 (S=1/40)



- |          |           |         |        |                     |                     |
|----------|-----------|---------|--------|---------------------|---------------------|
| 1 表土     | 16 赤色土層   | しまり緩い   | 粘性ややあり | 白色粘土ブロックを少量含む       | 棺の覆土か               |
| 2 淡赤褐色土層 | 17 淡赤色土層  | しまりあり   | 粘性弱い   | 径2cm程の白色粘土ブロック含む    | 棺の覆土                |
| 3 赤色土層   | 18 赤色土層   | しまり緩い   | 粘性ややあり | 径2cm程の白色粘土ブロック少量含む  |                     |
| 4 赤色土層   | 19 赤色土層   | しまり緩い   | 粘性ややあり | 径2cm程の白色粘土ブロック少量含む  |                     |
| 5 赤色土層   | 20 淡赤色土層  | しまり緩い   | 粘性ややあり | 混入物少ない              | 面的に明瞭               |
| 6 赤色土層   | 21 赤色土層   | しまり緩い   | 粘性ややあり | 土層の極め細かい            | 赤色土が主体だが白色粘土粒を多く含む  |
| 7 淡赤色土層  | 22 赤色土層   | しまりややあり | 粘性ややあり | 白色粘土粒を多く含む          |                     |
| 8 赤色土層   | 23 赤色土層   | しまりあり   | 粘性ややあり |                     | 1号主体部の設置面           |
| 9 赤色土層   | 24 赤色土層   | しまりややあり | 粘性ややあり |                     |                     |
| 10 淡赤色土層 | 25 赤色土層   | しまりややあり | 粘性ややあり | 白色粘土粒を多く含む          | 径5cm程の白色粘土ブロックを多く含む |
| 11 赤色土層  | 26 赤色土層   | しまり緩い   | 粘性ややあり |                     | 径5cm程の白色粘土ブロックを多く含む |
| 12 赤色土層  | 27 淡赤色土層  | しまりあり   | 粘性弱い   | 径2cm程の白色粘土ブロック含む    | ブロック状に固まりもろい        |
| 13 赤色土層  | 28 明黄褐色土層 | しまりややあり | 粘性あり   | 遺物包含層               | 白色粘土粒を多く含む          |
| 14 赤色土層  | 29 淡赤色土層  | しまりあり   | 粘性ややあり | 1号主体部埋葬後の最終盛土       | 墳丘周縁に施した盛土          |
| 15 淡赤色土層 | 30 淡赤色土層  | しまりややあり | 粘性ややあり | 径4cm程の白色粘土ブロックを多く含む | 径5cm程の白色粘土ブロックを多く含む |
|          | 31 暗褐色土層  | しまりややあり | 粘性なし   | 部分的に赤色土と層状になる       | 29層の白色粘土ブロックが主体になる層 |
|          | 32 明黄褐色土層 | しまりあり   | 粘性なし   | 主体となる盛土             | 炭化粒を含む              |
|          |           |         |        |                     | 旧表土層                |
|          |           |         |        |                     | 地山層                 |

第11図 J-1号墳主体部断面図 (S=1/40)

### (3) 出土遺物

J-1号墳からの出土遺物は、土師器が中心で、各トレンチから出土したものと墳頂調査区から出土したものに分けられる。

各トレンチから出土した遺物で、図化が可能なものにdトレンチの墳丘の崩落土中から出土した土師器の壺がある(第12図-1)。底部は平底でやや角度を持って胴部に至る。最大径は胴部の上半にあると思われる。頸は丸く撫でられ口縁部は明瞭な稜を持ちさらに外側に開く。いわゆる二重口縁の壺である。他にはk・gトレンチの周溝覆土から壺の胴部片等が、lトレンチの周溝覆土からはやはり二重口縁の壺の頸部片が出土している。

墳頂の調査区からは、装飾器台・高杯・小型壺などが出土している。装飾器台(第12図-2)は第1主体部プランの北端の確認面から受け部の破片が出土した。口縁部は大きく外反し、径5mmの円窓を持つ。円窓の数ははっきりしない。これを円盤状の2段目で受け、この端部が外側へ突出するのが2段目の表面の剥離痕によって想定される。高杯(第12図-3)は円錐台状の脚部が装飾器台と同様の位置から出土している。表面は赤彩されている。内面は丁寧に削られており、下半はやや内彎する。他には、丸底で口縁部が直に延びる小型壺などがある。

J-2号墳からの出土遺物としては、aトレンチの墳丘南側にあたる溝の堆積土からくぼみ底の壺と思われる土師器が出土しているほか、地紋に縄文を持つ広口の長胴壺片が数片出土している。

### (4) まとめ

ここで報告したJ-1号墳は、古墳時代の墳墓であることを確認することができた。その築造時期は、出土した土器の特徴から古墳時代の前期にあると考えているが、とりわけ、装飾器台についてはその出現する時期が限られており、畿内の土器編年と比較した場合、布留式の古段階に併行すると考えられる。

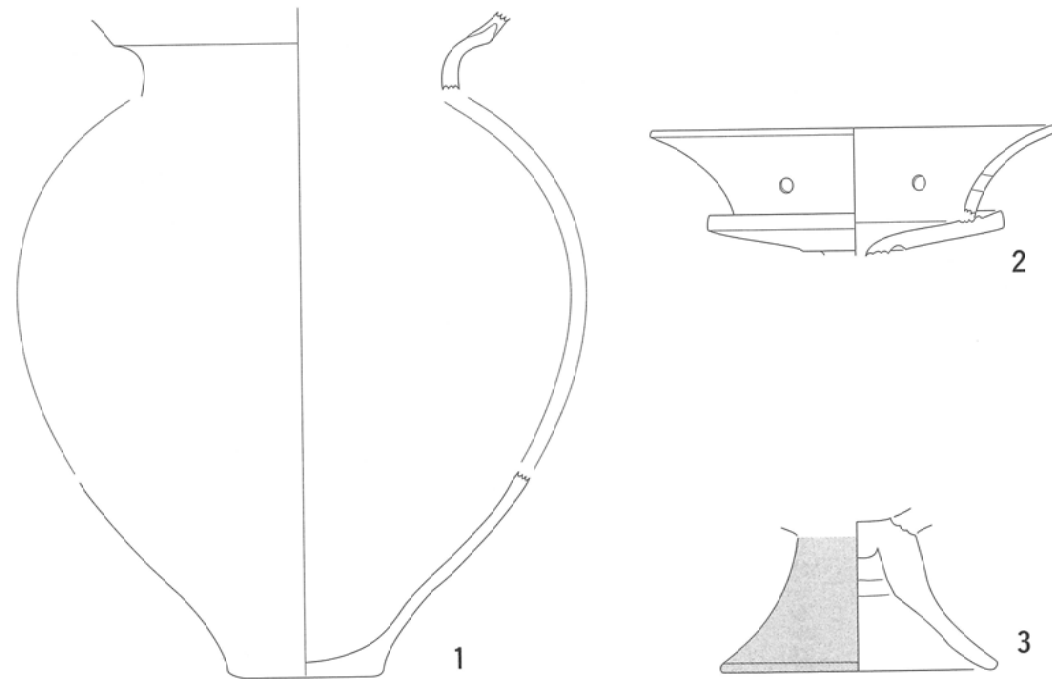
J-2号墳については、縄文の残る、古相を示す土器の出土が注目される。天王山式の伝統を残すものと考えられるが、出土状況から、土器が古墳に伴うものであるかは慎重な判断が必要である。しかし、この土器が墳丘の客土に混入していたものだとしても、この周辺に古墳時代に先んずる時期の遺構があった可能性は高く、これまで不明であった、当地の古墳築造にいたる時期を知る重要な手がかりとなることに変わりはない。今後の大きな調査課題となる事実である。

また、J-3号墳も、他の二墳と接する立地と明確な周溝の存在から古墳である可能性が



高いと考えている。

この結果により、陣が峰地区の3基を、下小松古墳群陣が峰支群として位置付けすることが妥当であると判断した。



第12図 出土土師器実測図 (S=1/3)

## 4 永松寺地区の調査

### (1) 測量調査

#### ①立地と現況

永松寺地区は、陣が峰地区の南に500 m程の間隔を空けて、南北400 m、東西200 m程の範囲で分布する。これらは、大きく3つのエリアにまとめることができる。

エリア内の北部には、E-1・E-2・E-3号墳がある。永松寺地区が位置する、南北へ延びる丘陵主脈から弧を描くように東から南東に延びる支脈が、標高230 m付近で東に分ける顕著な小尾根の稜線上に、これら3基はほぼ等間隔に並列してある。このうちE-1号墳は、後世の用水路の掘削により西半が削平されている。なお、この3基については、平成11年度に緊急発掘調査を実施しており、古墳時代の墳墓であることが確認されている。

E-5・E-6・E-7号墳は、永松寺地区が位置する尾根の標高256 mから258 m付近にある。植生のない状態では、東側の展望に優れる位置であるが、現況は松林に覆われている。

マウンドは、その存在を意識した目でやっと認識できる程度で、間を通る山道からでも気付くことは困難である。しかし、注意深く観察すると、マウンドの周囲には部分的に溝状の浅い凹地が認められる。平成11年秋に実施した分布確認調査ではいずれのマウンドも径4~5 m、高さ0.4~0.7 mの円形としている。

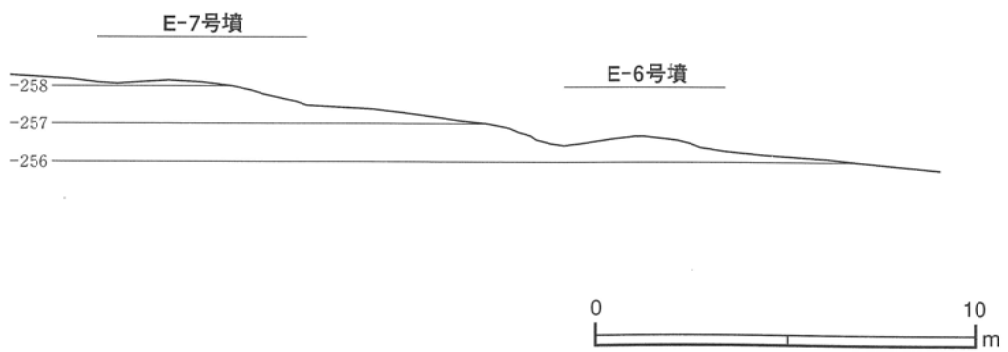
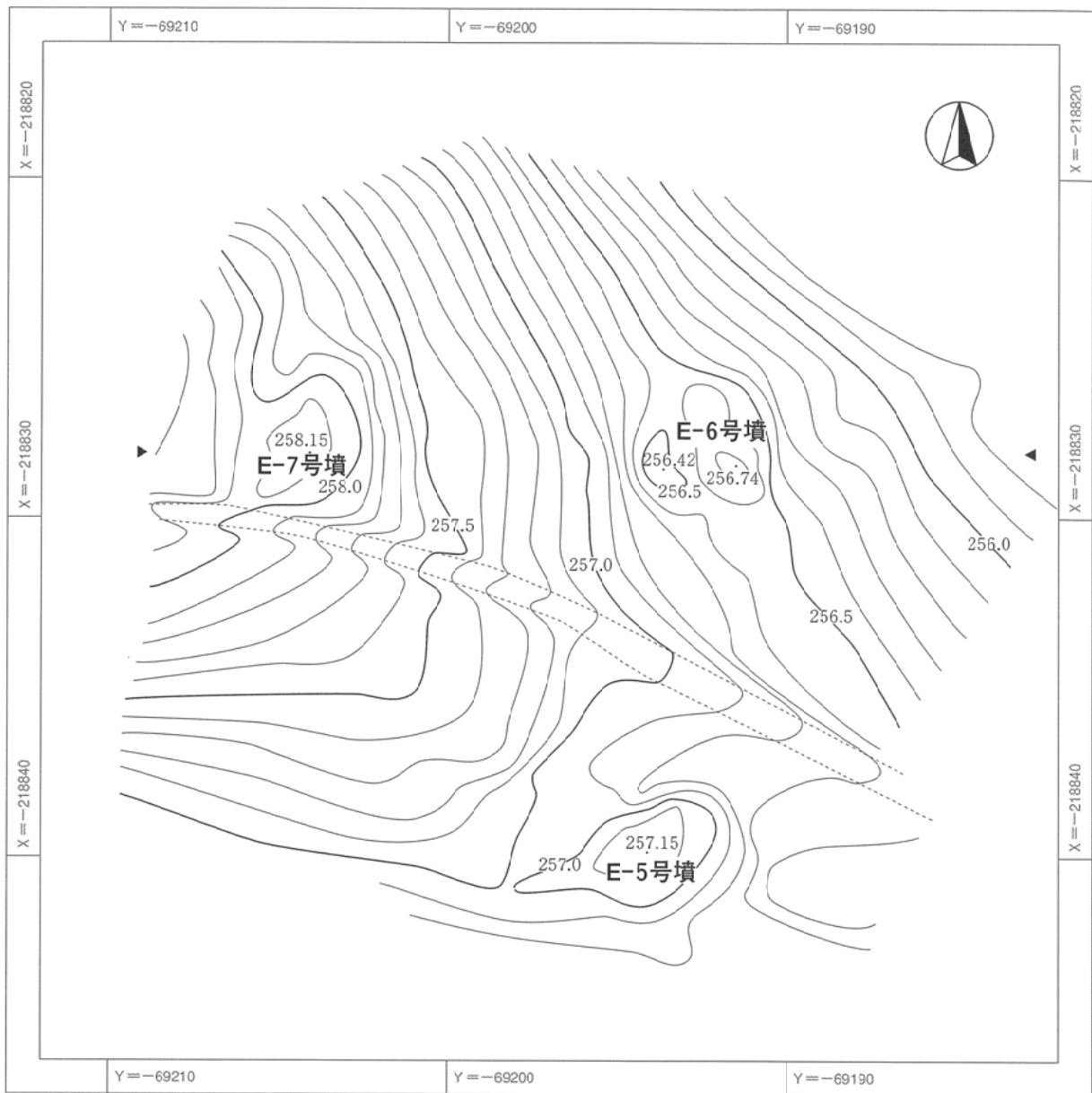
E-8号墳は、尾根の突端に位置し、頂部の標高は238.5 m、付近の田面との比高差はおよそ20 mである。東側の視界が大きく開けており、南には谷を挟んで下小松古墳群薬師沢支群が対峙する。

現況は雑木が生い茂るが、下草を刈ることによってマウンドとそれを囲む平坦面を明瞭に視認することができる。頂部は平坦で、嘉永年間の「湯殿山碑」と大正天皇即位記念と記された「公園之碑」がある。マウンドを囲む平坦面は最大で3段あることを確認することができるが、下方は昭和の半ばに用水路によって削られている。

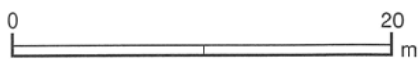
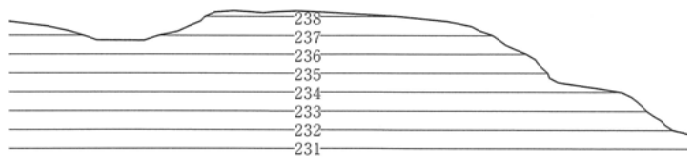
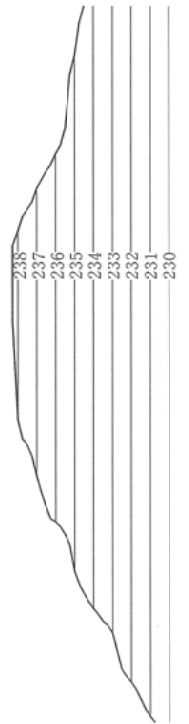
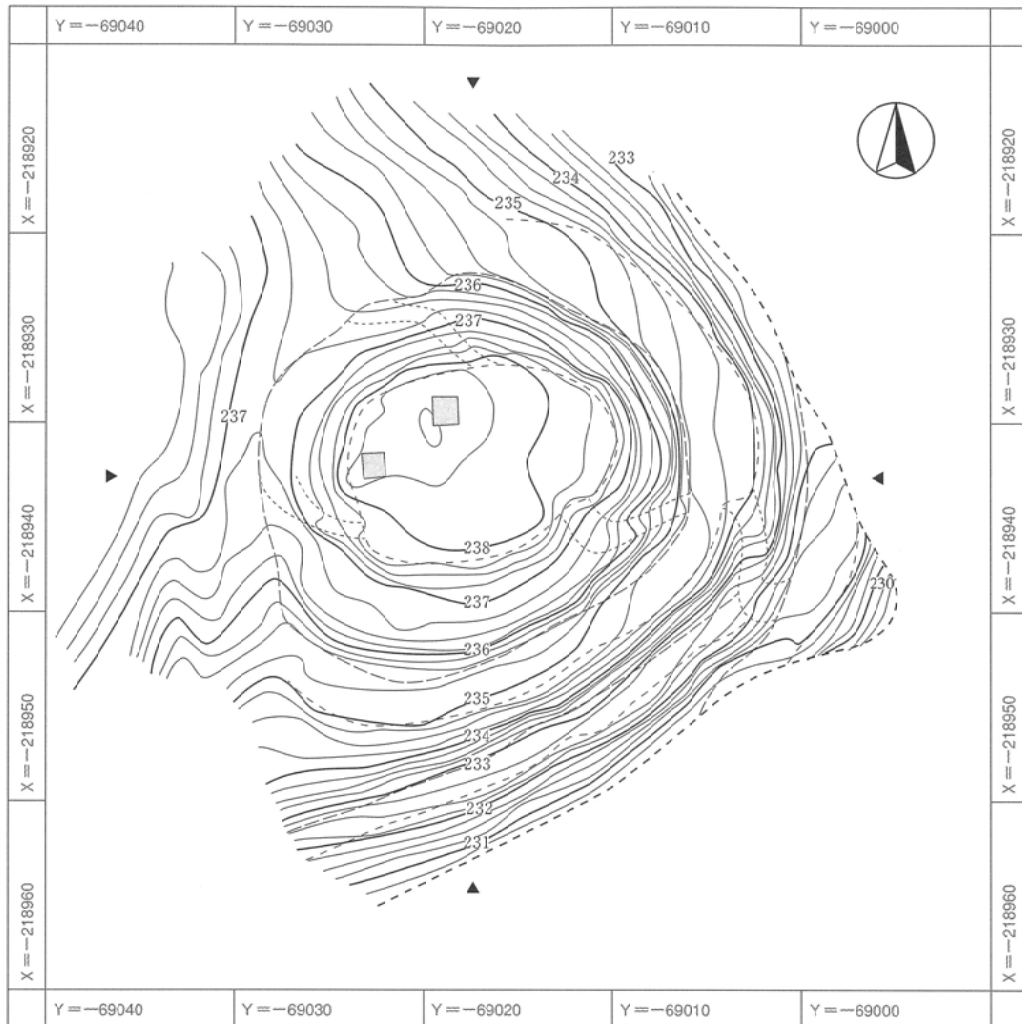
#### ②調査方法

測量のための絶対高と座標値については、前年度に設置した基準点古H 12-2 から移動したものを使用した。

E-5・E-6・E-7号墳の測量は、専門業者に委託して実施した。測量面積はおよそ500 m<sup>2</sup>である。測量図のスケールは1/100で、遺構の現況をより詳細に表現するための10 cm間隔の等高線を記入した図と他の図との比較を念頭に置いた25 cm間隔の等高線を記入した図の2通りを作成した。



第13图 E-5・E-6・E-7号墳測量図 (S = 1 / 200)



第 14 图 E-8号墳測量図 (S = 1 / 400)

E-8号墳では、これを利用し、任意に設定した5 m間隔のメッシュを用いて、およそ1,200m<sup>2</sup>を平板測量し、絶対標高による25 cm間隔の等高線を記入した1/100の平面図を作成した。

### ③調査成果

調査結果を縮小したものが第13図、第14図である。第13図に示したのはE-5・E-6・E-7号墳について、10 cm間隔の等高線を記入した図である。いずれのマウンドもこの間隔の等高線によってやっと表現できる程度であるが、小規模ながらも自然地形とは異なる高まりが測量図に反映されている。このうちE-6号墳ではマウンドの山側に顕著な三日月状の凹部が認められ、残りの2基とは異なる様相を示している。また、E-7号墳では南側が山道により改変されていることが予想される。

第14図のE-8号墳には、楕円形を呈する主丘とこれを囲む3段の平坦面が認められる。主丘の規模は長軸約24 m、短軸約19 mを測り、1段目の平坦面からの高さが東端で約3.5 mである。この主丘を囲む平坦面は、東半を巡る1段目の幅が2～4 m、南東部に認められる2段目の幅が1～1.5 m、東に一部だけが確認できる3段目の幅が2～3 mである。3段目の平坦面と頂部の比高差は約7 mである。

E-8号墳の測量図の検討では、地形に人為的な改変が加えられていることを指摘できるが、この改変が行われた時期については明確にすることはできない。また自然地形との関係から、最上段の一部だけに盛土が施され、残りの箇所については地山を削りだして整形していることを想定することができる。

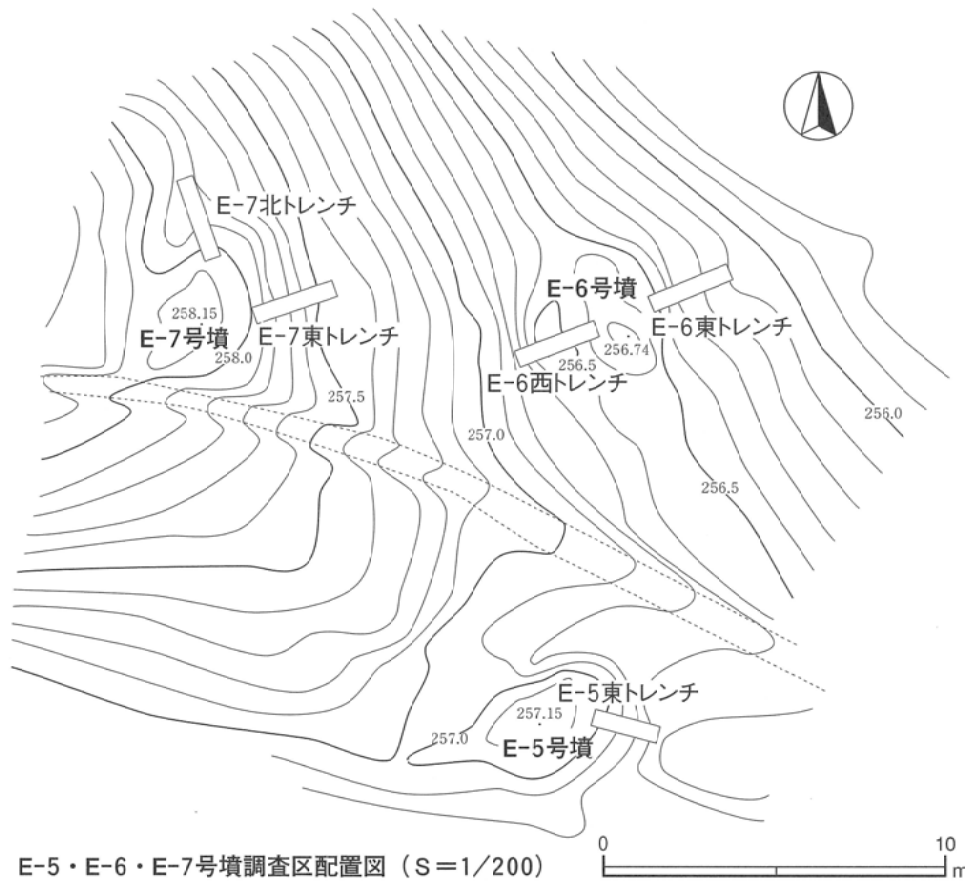
## (2) 発掘調査

### ①調査方法

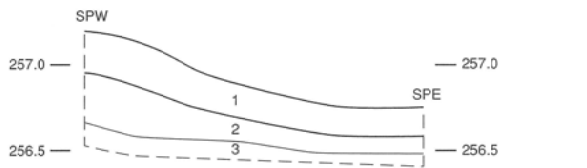
発掘調査は、遺構の歴史的 성격の確認という調査目的から、トレンチによる部分的な発掘方法を採用した。

E-5・E-6・E-7号墳のトレンチは3基合わせて5箇所を設定した。いずれのトレンチもクサレ礫を多く含む古赤色土層と呼ばれる明瞭な洪積層まで掘り下げ断面の観察と人為的な自然地形の改変状況を確認した。

E-8号墳のトレンチは、盛土の状況が把握できる箇所として主丘の北西部と南東部に1箇所ずつ設定した。周囲の平坦面は、周囲の地形と測量調査の結果から、発掘によって得られる情報は少ないと考え、調査区は2箇所のトレンチの発掘結果を受けて拡張することとしたが、結果的に発掘はこの2箇所のトレンチのみとなった。

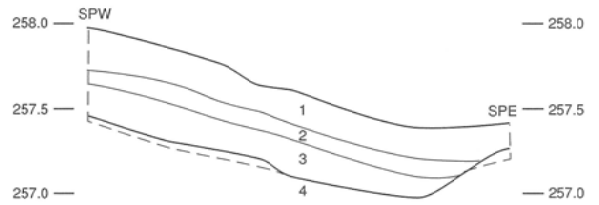


E-5・E-6・E-7号墳調査区配置図 (S=1/200)



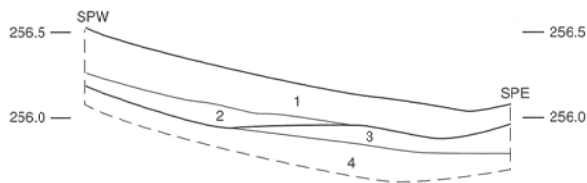
E-5号墳東トレンチ北壁断面図 (S=1/40)

- 1 暗褐色土層
- 2 赤褐色土層 地山
- 3 黄褐色土層 地山



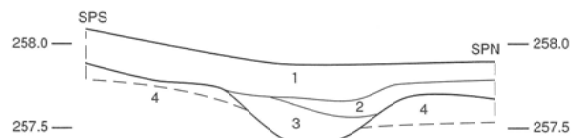
E-7号墳東トレンチ北壁断面図 (S=1/40)

- 1 褐色土層 赤みを帯びる しまり緩い
- 2 暗褐色土層
- 3 褐色土層 しまり強い
- 4 黄褐色土層 地山



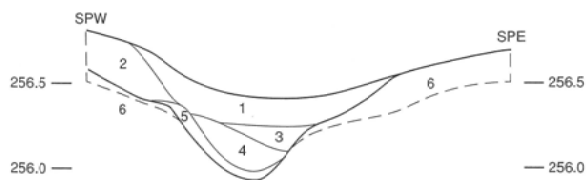
E-6号墳東トレンチ北壁断面図 (S=1/40)

- 1 明褐色土層
- 2 暗褐色土層
- 3 赤褐色土層 地山
- 4 黄褐色土層 地山



E-7号墳北トレンチ西壁断面図 (S=1/40)

- 1 褐色土層 しまり緩い
- 2 暗褐色土層
- 3 褐色土層 粘性なし
- 4 黄褐色土層 部分的に赤み強い 地山



E-6号墳西トレンチ北壁断面図 (S=1/40)

- 1 明褐色土層
- 2 褐色土層
- 3 褐色土層 暗褐色土をブロック状に含む
- 4 暗褐色土層 炭化物を多く含む
- 5 褐色土層 やや赤みを帯びる
- 6 赤褐色土層 地山

第15図 E-5・E-6・E-7号墳調査区配置図・断面図



## ②調査成果

E-5号墳では、マウンドの南側に2 m×0.5 mのトレンチを配した。層序は自然堆積によるものとみられ、マウンド裾の傾斜変換付近でも人為的な地形改変の痕跡は認められなかった。また、マウンドに明瞭な盛土を確認することもできなかった。

E-6号墳には、マウンドの東西に計2本、それぞれ2.5 m×0.5 mのトレンチを設定した。西側のトレンチは、現況で視認できる顕著な三日月状の凹みを横断する位置に配した。このトレンチでは、中央部分に幅0.8 mに渡りマウンドの裾に沿って南北方向に延びる地山を掘り込んだ溝状の痕跡を確認することができた。ここには炭化材を多く含む極めの細かい暗褐色の土層が約0.3 mの厚みを持って堆積しており、経験から堆積後に一定の期間が経過していることを覗かせた。一方でこの溝は現在の表土の直下から掘り込まれていると捉えることも可能で、掘り込み時期の判断は困難な状況であった。しかし、マウンドの裾部に沿って掘られている状況は、マウンドと溝の成立時期が一致していることを示しているであろう。

マウンド東側のトレンチでは、地山の顕著な改変は認められず、土層は、地山上に見られる薄い暗褐色土とその上層の褐色土層に限られている。なお、これらの層が自然堆積に拠るものなのか人為に拠るものなのかを判断する根拠はない。

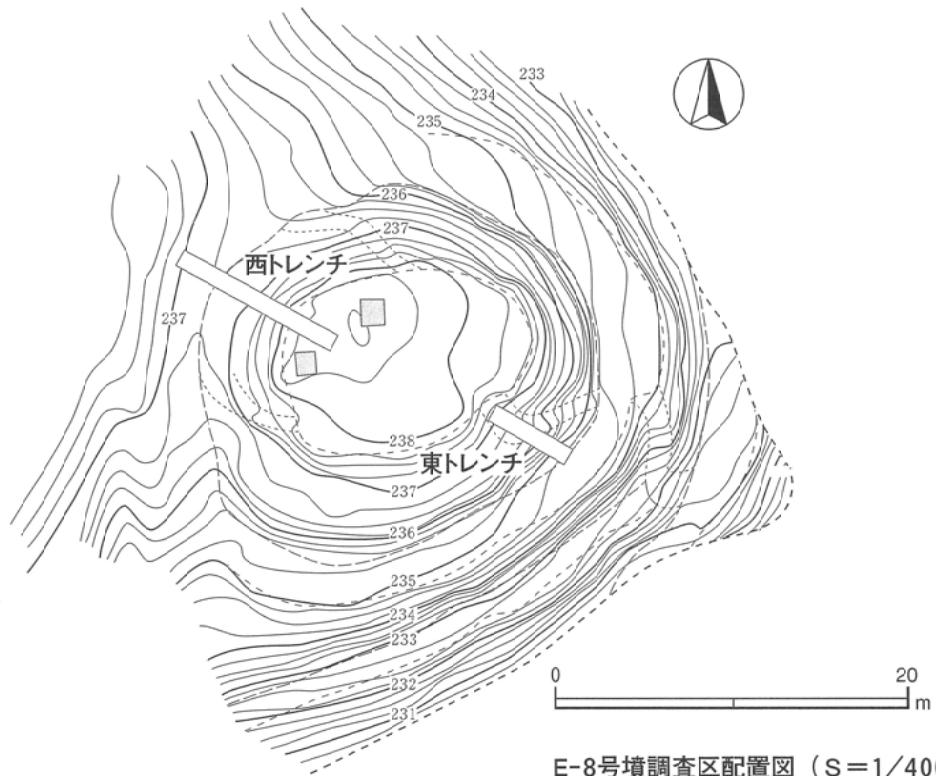
E-7号墳はマウンド北側と東側に計2本、それぞれ2.5 m×0.5 mのトレンチを設けた。北側のトレンチでは、E-6号墳の西側同様、マウンドの裾に沿って断面が緩いU字形の溝状の掘り込みを確認することができた。掘り込みは幅1.0 mでこの溝の下層には乾いた感觸の褐色土があり、その上層には暗褐色土の堆積が認められる。さらに、これらを覆うように褐色土の堆積があり、地山の掘り込み時期は、約0.3 m前後の厚みを持つ褐色土の堆積以前と判断できる。

東側のトレンチでも北側同様、地山の掘り込みが確認できているが、断面の形態はより緩く開くU字形でマウンド側の掘り込みの肩部分が判然としないまま自然地形に連続している。層序は、地山の直上に地山とは異なるしまりの強い褐色土層があり、さらに暗褐色の土層がマウンド上から掘り込みの肩まで堆積する。最上層には北側トレンチで確認できたのと同じ褐色土層が全面に堆積している状況である。

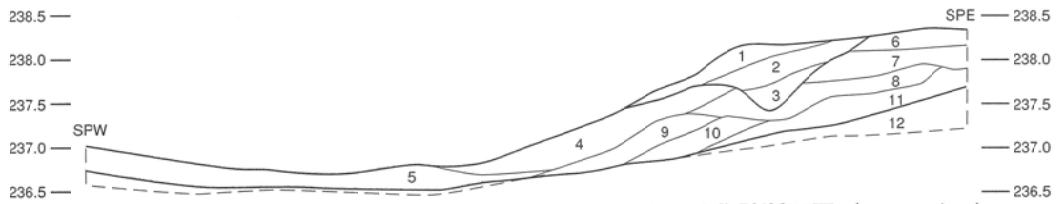
次にE-8号墳の発掘調査についてみていきたい。

主丘北西部に設定した1トレンチでは、盛土の状況と山側の地形との関わりを明らかにすることができた。盛土は一次的に盛られたと見られる締まりのある層群と、二次的に盛られたと見られる締まりの緩い層群に分けられ、ともに主丘の中央部から裾方向へ向けての堆積状況であった。二次的な盛土はトレンチで相対する側では確認できていないので、抜根等に伴う部分的なものであることが想定できる。

地山は中央から裾方向へ向けて緩やかにレベルを減じ、最低鞍部を経て山側に向けて徐々にレベルを増す。この間に目立った溝状の掘り込みはなく、多少の面的な削平を除け

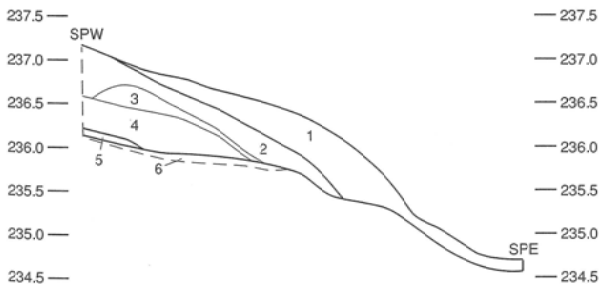


E-8号墳調査区配置図 (S=1/400)



西トレンチ北壁断面図 (S=1/80)

- |                                  |  |
|----------------------------------|--|
| 1 暗茶褐色土層 しまり緩い 粘性なし 小砂利を多く含む     | 7 暗褐色土層 しまりやや緩い 粘性なし 砂利を含む             |
| 2 暗褐色土層 しまりやや緩い 粘性なし やや大きめの砂利を含む | 8 茶褐色土層 しまりあり 粘性ややあり 比較的純粋な層           |
| 3 茶褐色土層 しまり緩い 粘性なし               | 9 茶褐色土層 しまりややあり 粘性ややあり 径4 cm程のクサレ礫を含む  |
| 4 茶褐色土層 しまりやや緩い 粘性なし             | 10 赤褐色土層 しまりあり 粘性ややあり 径4 cm程のクサレ礫を含む   |
| 5 暗褐色土層 しまりやや緩い 粘性なし 自然堆積土       | 11 赤褐色土層 しまりあり 粘性ややあり 径4 cm程のクサレ礫を多く含む |
| 6 褐色土層 しまりあり 粘性弱い 小砂利を多く含む       | 12 赤褐色土層 しまりあり 粘性なし 地山層                |



東トレンチ南壁断面図 (S=1/80)

- |  |
|--|
| 1 暗褐色土層 しまり緩い 粘性なし                     |
| 2 赤褐色土層 しまりややあり 粘性なし 上部はきめ細かい          |
| 3 赤褐色土層 しまり緩い 粘性弱い 径4 cm程のクサレ礫を多く含む    |
| 4 赤褐色土層 しまり緩い 粘性弱い 径4 cm程のクサレ礫を非常に多く含む |
| 5 黒色土層 しまり緩い 粘性なし 旧表土                  |
| 6 赤褐色土層 しまりあり 粘性なし 地山層                 |

第16図 E-8号墳調査区配置図・断面図

ば、地山に対する顕著な改変を認めることはできない。

主丘南東部に設定した2トレンチでも同様に盛土の状況を確認することができた。盛土は総じて締まりが緩く、いずれも頂部方向から裾へ向けて流れている状況である。地山に多く含まれる径5cm程のクサレ礫が主丘中央寄りの盛土の下層に多く見られ上層に上がるにつれその量を減じる。また、2層の直上には土壌化が進んでいない旧表土を確認することができた。このことから、最上層はごく近年の盛土もしくは盛土の崩落土と考えられる。

地山上では主丘中央寄りに盛土を施す以前の旧表土を確認することができるが、他では認められない。また、地山は標高235.4m付近に不自然な幅60cm程の段(平坦面)を持っている。これらから、地山には人為的な整形が行われていることがわかる。

さらには、築造当初、このトレンチ範囲での主丘の裾は、2層直上の旧表土の存在とあわせ、この層が地山と接する235.4m付近にあったと判断できる。

なお、いずれのトレンチにおいても近世以前の遺物は全く発見されなかった。

### (3) まとめ

E-5・E-6・E-7号墳は、径4～5mの極めて小規模なマウンドである。これら3基のマウンドについては、立地と規模の画一性から同一の性格を有する遺構であると考えられるが、今回の部分的な調査の結果、5箇所トレンチのうち3箇所からマウンドを巡る溝状の掘り込みが確認された。土層の状況を見る限り、それぞれのマウンドは顕著な盛土を持たず、地山を溝状に掘り込むことで顕在化を行っている。さて、このマウンドが人為的なものであることに疑いはないが、この性格については依然不明であるといわざるをえない。ただ、今回の調査において、古墳の可能性を否定するものはなく、下小松古墳群の範囲内に存在する状況は、むしろ古墳である可能性を強くするものと考えたい。

E-8号墳は、下小松古墳群の範囲内に存在し、径20mを超える円形の塚状のマウンドであることから、当然、古墳を意識しての発掘調査であった。しかし、調査成果を検討した結果、①古墳にしばしば見られる版築の工法が採られていないこと、②同様に、自然地形とマウンドを切り離す溝状の掘り込みが認められないこと、の2点を主な理由に、E-8号墳を古墳と判断することは困難であるとの結論に達した。

なお、この調査の期間中、近所に住む方からこの場所について「大正の初め頃、地元の青年団で造成し公園と称した」との話を聞いた。その後数人の方からも同じ話を聞くことができた。これについては別途資料の調査を考えているが、発掘調査の所見とも合致することから、この遺構は近世から近代のものと判断するのが適切であると考えている。

以上、永松寺地区ではE-8号墳を除いた6基(E-4は欠番)について、下小松古墳群永松寺支群と位置付けておきたい。

## 5 尼が沢地区の調査

### (1) 測量調査

#### ①立地と現況

尼が沢地区は、小森山支群のおよそ500m南西、南東を向いた丘陵の斜面で、南北150m、東西50mほどの範囲に計8基のマウンドが分布している。分布範囲は大部分が山林で、植生のない状態では東側の展望に優れている。

A-1は、標高243mから245mに位置し、一辺20mほどの方形を呈する。丘陵の傾斜が急速に減じる変換線上にあり、昭和30年には尼ヶ沢土壇として山形県指定史跡となっている。

A-2からA-6とした5基のマウンドはA-1の北およそ75mの雑木に覆われた山中にある。南東に向かって標高を減じる斜面が、いくぶん傾斜を緩めテラス状になった標高258mから264mに5基のマウンドがまとまって位置するが、マウンドの規模は非常に小さく、判然としない。

A-7は唯一稜線に近い斜面に位置し、A-2からA-6の一群よりもマウンドの存在は明確である。標高はおよそ271mをはかる。

また、これらから東に大きく離れた場所にA-8としたマウンドがある。後世に水路により一部が削られているようである。

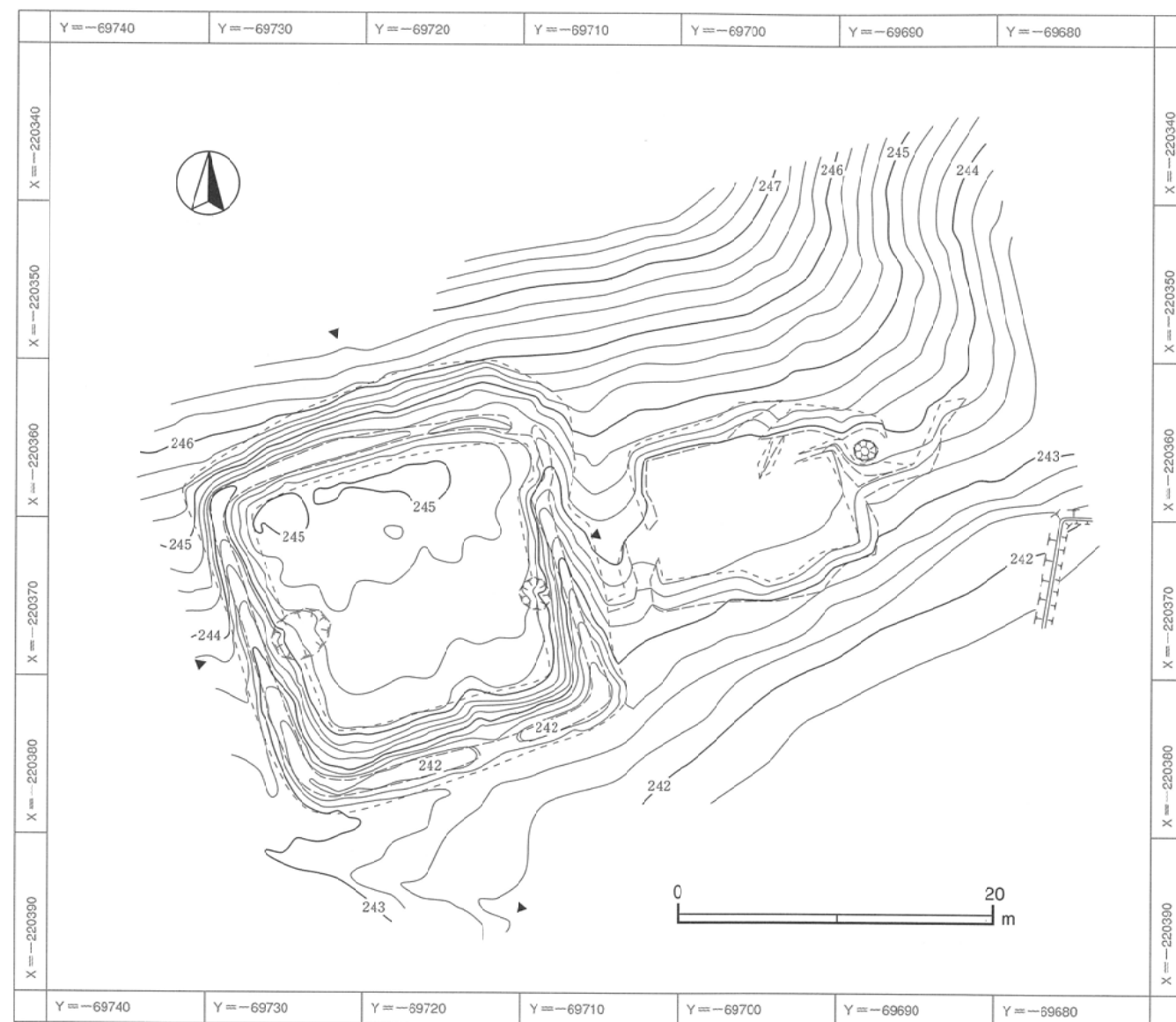
現況を観察する限り、A-8をのぞき、いずれのマウンドも後世の大規模な改変はないものと考えられる。なお、A-1の南東500mに位置する千松寺の由来として、前九年の役で安倍氏と対峙した八幡太郎義家と側室妙法尼の子、千松君がこの地で5歳で亡くなった供養に尼寺を建てたとの話が伝わっており、このA-1のマウンドは、この由来に関係する遺構とも考えられてきている。

#### ②調査方法

測量のための絶対高と座標値は、平成13年度に新設した基準点、古H13-1(X=-220369.153、Y=-69690.509、H=242.270)と古H13-2(X=-220266.404、Y=-69466.810、H=230.870)を利用した。

A-1については、7点からなる閉鎖トラバースを、A-2からA-6についても7点からなる閉鎖トラバースを組み、これに単独のポイントを置いたA-7を加えた3箇所を開放トラバースで繋ぎ、各マウンドの位置関係を把握した。

A-1のトラバースは、頂部中央に置いたP0を基準として仮の主軸上にPNとPS1、



第17図 尼ヶ沢土壇測量図 (S = 1 / 400)

PS2を、これにP0で直交する線上にPEとPWを置き、さらにP0の南西にPSWを設置し補足した。

詳細な測量図は、A-1を中心にしたおよそ900m<sup>2</sup>を平板測量し、絶対標高による25cm間隔の等高線を記入した1/100の平面図を作成した。トラバースの各点には基準点から移動した標高を持たせており、調査中は主にこれらの標高を利用した。

また、発掘調査の終了後、この周辺部を専門業者に委託し補足測量を行った。

### ③調査成果

A-1の平面図が第17図である。A-1のマウンドは測量図からの計測では東西19.2m、南北19.6mをはかるほぼ正方形であるが、北東コーナーだけが東に台形状に張り出す。四周は張り出し部も含めて断面U字形の溝に囲まれ、溝の立ち上がりまでを含めた人為的な改変の施されている範囲は東西23.6m、南北26.0mに及ぶ。

マウンドの裾のラインは各辺とも直線的でコーナーもほぼ直角にまがる。マウンド上部は北から南に緩やかに標高を減じてはいるものの非常に平坦である。この平坦面は北半のほうが幅広で、南に向けて幅を徐々に狭めており、その平面形態は台形である。

マウンドの最高標高は245.1m、溝底の最低標高は241.9mで、見かけの高さは3.2mである。溝底の標高は、北辺で244.2m、南辺で241.9mをはかる。南辺の溝はそのほぼ中央が高まっているが、道として利用されている箇所であることから後世の客土であると考えられる。

なお、A-1の東に東西12m×南北8mほどの人為的な平坦面があり、道状の遺構でA-1と繋がっている。

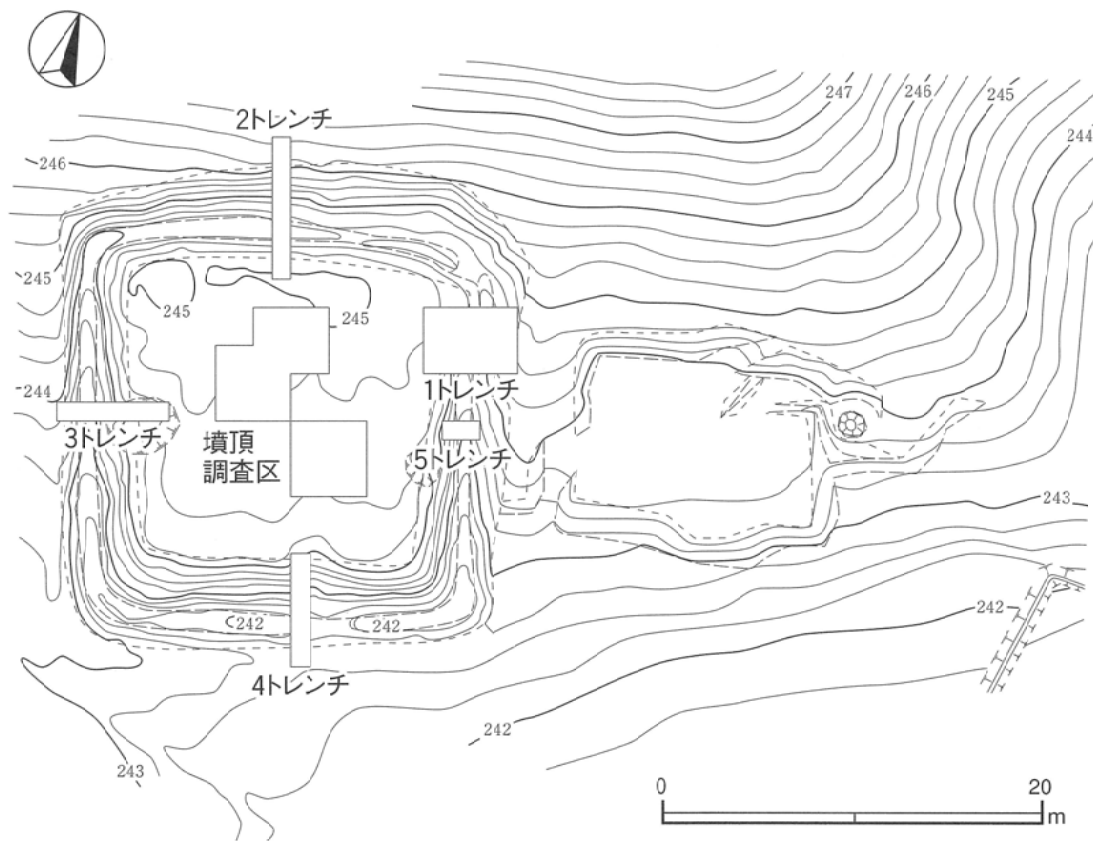
全体として、非常に整った印象を与える遺構であり、下小松古墳群中には類例をもたない異色な存在である。

## (2) 発掘調査

### ①調査方法

発掘調査の方法は、A-1を対象に、マウンドの規模と歴史的性質を確認するため、トレンチによる部分的な発掘とした。

ここでは、5箇所のトレンチと、頂部平坦面に調査区を設けた。トレンチは北東コーナーの張り出し部の検討材料を得ることを目的とした1トレンチのほかは、マウンドの仮軸上の東西南北に4本を設定し、地形改変の状況やマウンド規模の把握を行った。頂部の平坦面には、4m×4mのグリッドを設定し、平面で遺構の有無を確認し、必要に応じ拡張した。



第18図 尼ヶ沢土壇調査区配置図 (S = 1 / 400)

## ②調査成果

1 トレンチは、5 m × 4 m の大きさで、張り出し部の南コーナーを調査区内に取り込んだ。表土を除去した時点で、張り出し部の上面に部分的に径 10 cm から 20 cm 程度の川原石が認められた。また、この時には、堆積土と盛土を平面的に確認することができ、これを層序に従い発掘した。その結果、当初の溝が時間の経過とともに自然堆積によって埋まった後、張り出し部が現況の状態に土が盛られ、溝も、この張り出しを巡るかたちで付け替えられていることがわかった。また、発掘された当初の溝は、マウンドを全周する溝の延長線上にあり、当初、マウンドとこれを巡る溝は、張り出し部をもたない、より正方形に近い平面形態を呈していたことが明らかになった。

2 トレンチはマウンドの北側に設定した。溝は、上端の幅およそ 2 m、下端の幅およそ 1 m で地山を掘り込んでいて、底はどちらかというところ平らである。その 1/3 ほどが、すぐに崩落土などで埋まった後、徐々に堆積が進んだようだ。マウンド側にはほとんど盛土の痕跡は認められなかったため、地山の削りだしによってのみ、マウンドの顕在化が図られていることがわかる。また、マウンドに対峙する北側の斜面も地山上の古い自然堆積の褐色土を削り出しているようである。

3 トレンチはマウンドの西側に設定した。ここでも地山が上端の幅およそ 2 m、深さ 0.7 m ほど掘り込まれている。2 トレンチに比して掘り込み直後の崩落土などによる埋土は少なく、ほとんどが、時間の経過を必要とする堆積土である。一方マウンドには 3 層に分層可能な盛土が施されているが、その方法に顕著な特徴は認められない。マウンドに対峙する側は溝の傾斜の延長で上方から掘り込まれている。

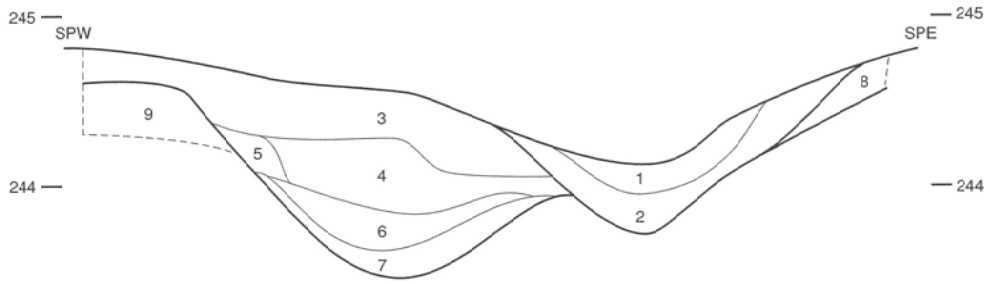
4 トレンチはマウンドの南に設定したもので、他と同様、地山まで掘り下げた。幅 2.2 m 程の溝が掘り込まれているが、底は丸い。マウンドには 5 層に分層できる盛土がほぼ水平に盛られているのが観察できる。また、マウンドから溝を挟んだ側にも四辺で唯一土手状の盛土が施され、溝の深さを造りだしている。

5 トレンチはマウンドの東に設定した。地山を無駄なく掘り込んでいて、3 トレンチと同様、崩落土による埋土はほとんど認められない。

頂部平坦面の調査区は、P0 を基準に 4 m × 4 m のグリッドを設定し、このうち P0 の北西と南東の 2 箇所を発掘し、必要に応じ拡張することとした。

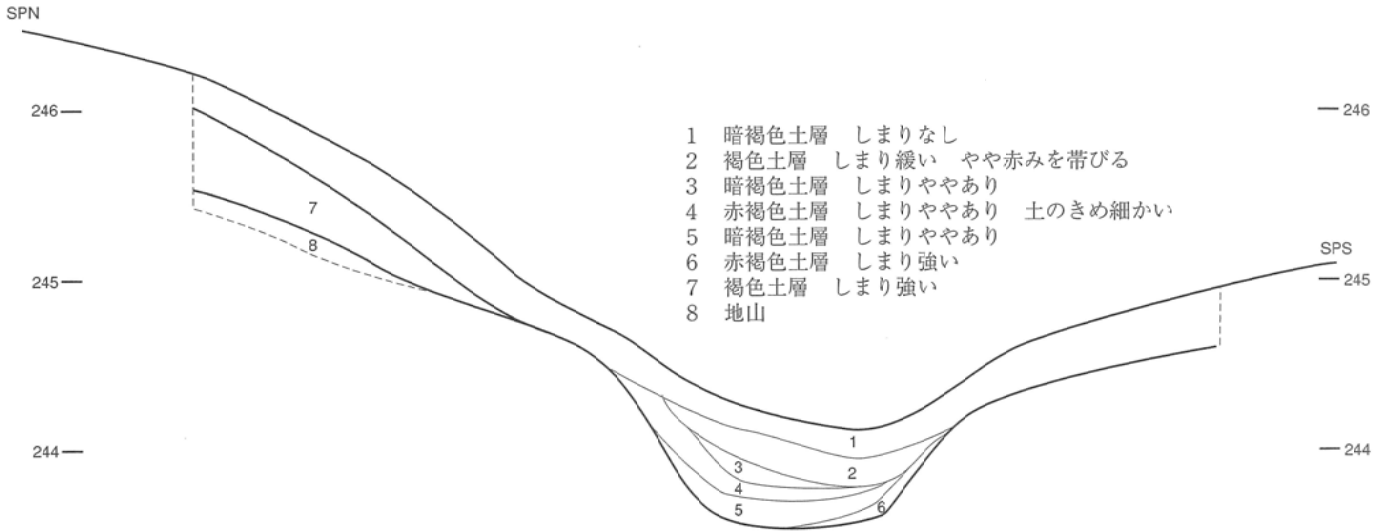
表土を除去した段階で遺構の有無を確認した。南東の調査区では遺構は確認されなかったが、北西の調査区で径 10 cm から 20 cm ほどの川原石の集石が認められた。この集石は調査区外まで広がっていたため、調査範囲を北東に拡張したところ、集石の範囲は、マウンド軸線上のおよそ 3 m × 3 m であった。石の並びに規則性はないものの、隙間なく並べられている様子は何らかの意図を感じさせるものである。また、この集石の一部を除去したところ、これらはマウンド上に貼り付けられた状態で、下層に別遺構は認められなかった。

なお、いずれのトレンチ、調査区からも近世以前の遺物の出土はなかった。



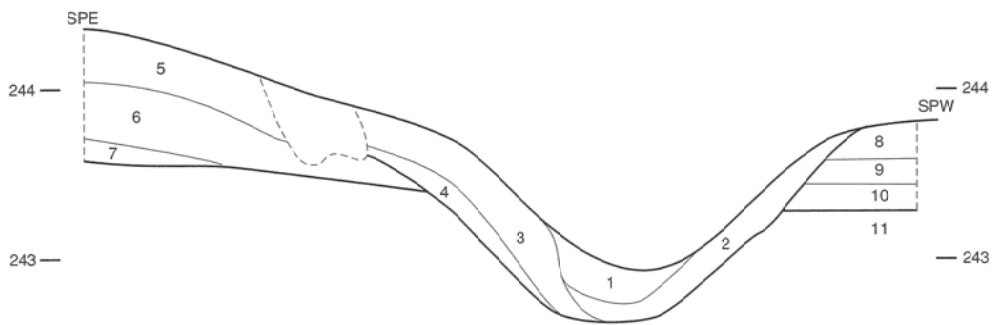
1トレンチ北壁断面図

- |         |         |               |         |       |           |
|---------|---------|---------------|---------|-------|-----------|
| 1 暗褐色土層 | しまりなし   | ごく新しい堆積土      | 6 暗褐色土層 | しまり緩い |           |
| 2 褐色土層  | しまりややあり | 炭化粒をを含む       | 7 暗褐色土層 | しまり緩い | 6層より暗い    |
| 3 明褐色土層 | しまり強い   | 径1cm程度の炭化材を含む | 8 褐色土層  | しまり強い | 地山上の自然堆積土 |
| 4 褐色土層  | しまりゆるい  |               | 9 地山    |       |           |
| 5 褐色土層  | しまり強い   |               |         |       |           |



2トレンチ東壁断面図

- |         |         |          |
|---------|---------|----------|
| 1 暗褐色土層 | しまりなし   |          |
| 2 褐色土層  | しまり緩い   | やや赤みを帯びる |
| 3 暗褐色土層 | しまりややあり |          |
| 4 赤褐色土層 | しまりややあり | 土のきめ細かい  |
| 5 暗褐色土層 | しまりややあり |          |
| 6 赤褐色土層 | しまり強い   |          |
| 7 褐色土層  | しまり強い   |          |
| 8 地山    |         |          |

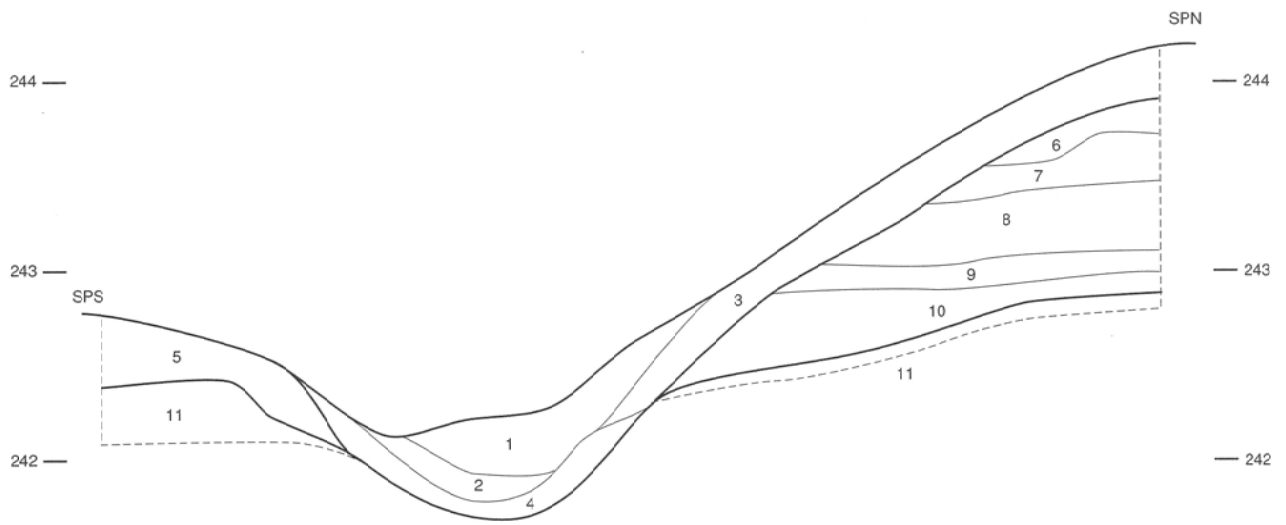


3トレンチ南壁断面図

- |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|
| 1 暗褐色土層 | しまりなし   | 7 暗褐色土層 | しまりややあり |
| 2 暗褐色土層 | しまり緩い   | 8 褐色土層  | しまりややあり |
| 3 明褐色土層 | しまり緩い   | 9 暗褐色土層 | しまりややあり |
| 4 褐色土層  | しまりややあり | 10 褐色土層 | しまりややあり |
| 5 明褐色土層 | しまりややあり | 11 地山   |         |
| 6 褐色土層  | しまりややあり |         |         |

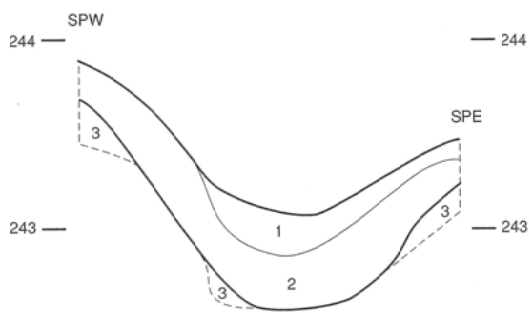
第19図 尼ヶ沢土壇調査区断面図(1) (S=1/40)





4トレンチ西壁断面図

- |         |          |          |          |         |
|---------|----------|----------|----------|---------|
| 1 暗褐色土層 | しまりゆるい   | 7 暗褐色土層  | やや赤みを帯びる | しまりゆるい  |
| 2 暗褐色土層 | やや赤みを帯びる | しまりややあり  | 8 黄褐色土層  | しまりややあり |
| 3 赤褐色土層 | しまりゆるい   | 9 褐色土層   | しまりややあり  |         |
| 4 黄褐色土層 | しまりややあり  | 10 暗褐色土層 | しまりややあり  |         |
| 5 暗褐色土層 | しまりゆるい   | 11 地山    |          |         |
| 6 黄褐色土層 | しまりゆるい   |          |          |         |



5トレンチ北壁断面図

- |         |         |
|---------|---------|
| 1 暗褐色土層 | しまりゆるい  |
| 2 褐色土層  | しまりややあり |
| 3 地山    |         |

第20図 尼ヶ沢土壇調査区断面図(2) (S=1/40)

### (3) まとめ

今回の調査では、尼が沢地区に点在するマウンドの位置的な確認を行い、A-1について発掘調査を行った。

A-1は、発掘調査の結果、東西19.2m、南北20.4mの平面形態がほぼ正方形のマウンドとこのマウンドを全周する幅2mほどの溝からなる遺構であることが判った。さて、この遺構の性格については、これまで「尼ヶ沢土壇」と呼ばれていたように、中世の修験道との関わりで論じられてきたが、ここでは、下小松古墳群の一部（古墳時代の墳墓）と考えることができるかを検討しておきたい。

今回の調査において得ることができた検討材料は、遺構の位置と形態、築造方法に限られる。まず、位置についてであるが、この遺構は南東方向が開けた丘陵の裾部にある。換言すれば南東を向き、丘陵を背にして造られていることになる。下小松古墳群の各古墳の立地は、20m程度の規模を持つものの殆どは尾根上にあり、より小規模なものでも稜線に近い斜面に位置することが知られている。

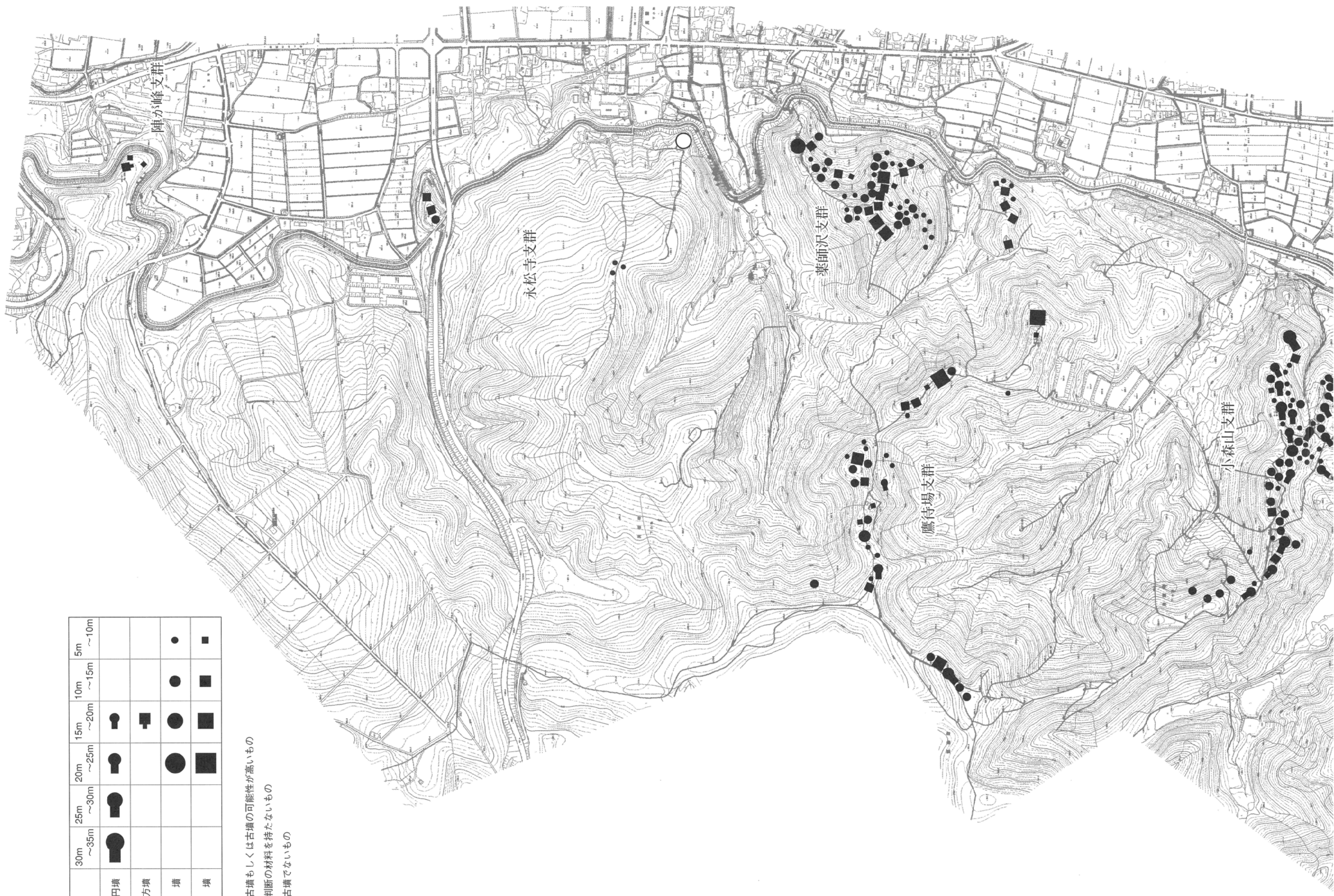
また、形態について、古墳群中の方墳では、現状で四辺が直線的で各々のコーナーを明瞭に観察できるものはK-62に限られる。このK-62は、他の多くの古墳と同様、頂部に陥没墳があり、A-1はこの点でも古墳とは異なる特徴をもっているといえる。

さらに、築造方法についてみても、トレンチの所見ではA-1は土を平坦に積み上げて高さを出しているが、下小松古墳群の古墳では、一般に土手状の盛り土を行った後に中央部に土を充填する工法が用いられていることが多い。

このように、A-1と古墳との共通性は乏しい。しかし一方で、川西町に西隣する飯豊町中村原土壇とは、一辺が8.4mと規模は異なるものの、周溝の存在や頂部の平坦面のありかたなどに共通性を見出すことができる。さらに修験遺構との関係の深い真言宗の古刹千松寺の存在や、南方を向き山を背にするという立地などからも、宗教的な施設と判断するのが適当であると考えている。

なお、尼が沢地区にある他のマウンドについては、判断の材料を持たない。ただし、尼が沢地区のマウンドについては、現状では下小松古墳群の範疇から外して考えておいたほうが無難であろう。





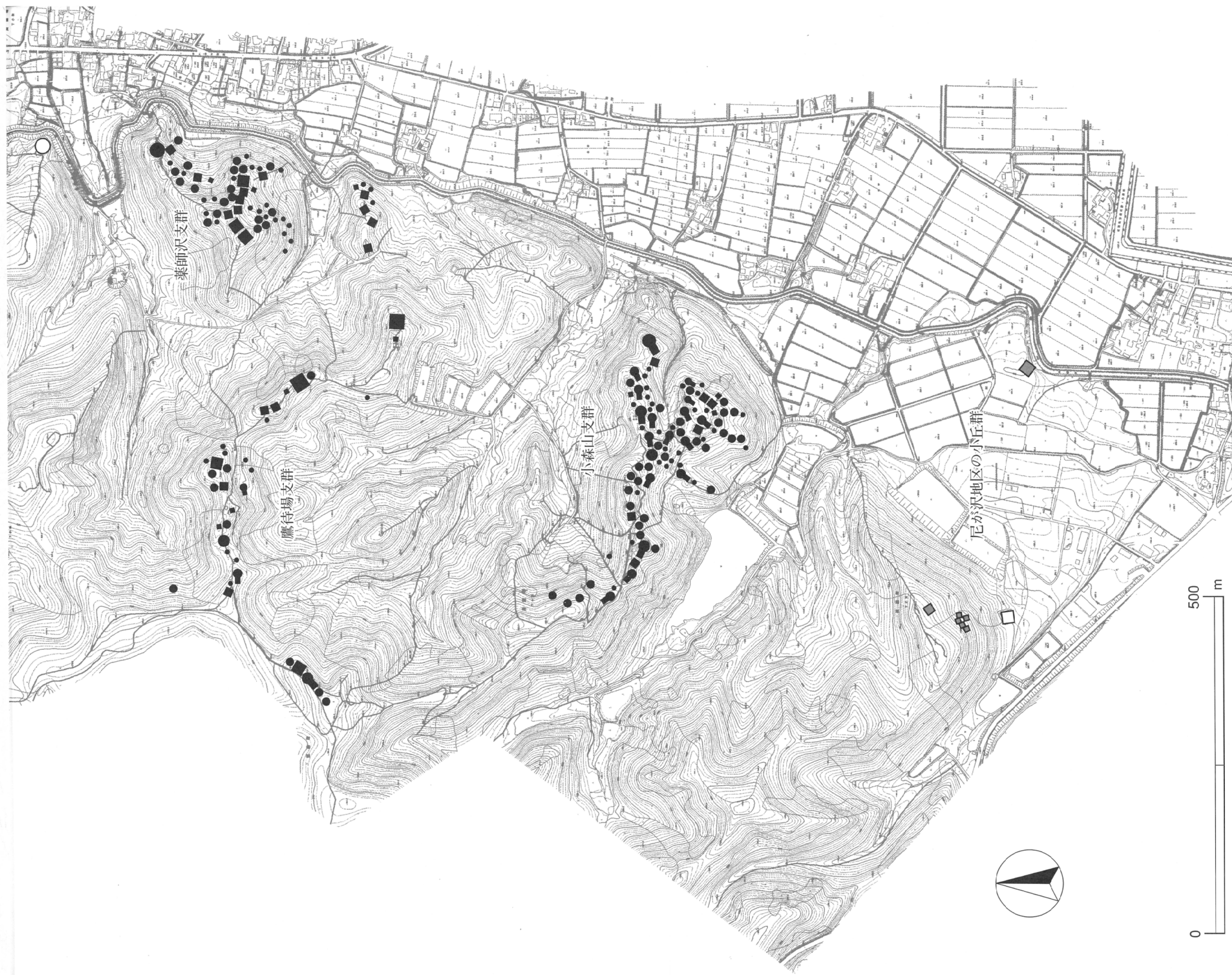
	30m ~35m	25m ~30m	20m ~25m	15m ~20m	10m ~15m	5m ~10m
前方後円墳	●	●	●	●		
前方後方墳	■	■	■	■		
円墳	●	●	●	●	●	●
方墳	■	■	■	■	■	■

■ 古墳もしくは古墳の可能性が高いもの

■ 判断の材料を持たないもの

□ 古墳でないもの





第21図 下小松古墳群分布図 (S=1/5,000)

## 報告書抄録

ふりがな	しもこまつこふんぐん (5)							
書名	下小松古墳群 (5)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	川西町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	齊藤敏明							
編集機関	川西町教育委員会							
所在地	〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松 1736-2							
発行年月日	平成15年3月							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもこまつこふんぐん 下小松古墳群 じんがみねしぐん 陣が峰支群 えいしょうじしぐん 永松寺支群 あまがさわどだん 尼ヶ沢土壇	やまがたけん 山形県 ひがしおいたまぐん 東置賜郡 かわにしまち 川西町 おおあざ 大字 しもこまつ 下小松	6832		38度 1分	140度 2分	20000424 ~ 20000719 20010514 ~ 20010628 20011108 ~ 20011122 20021008 ~ 20021203	測量調査 4400 m <sup>2</sup> 発掘調査 212.5 m <sup>2</sup>	範囲確認
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
しもこまつこふんぐん 下小松古墳群 じんがみねしぐん 陣が峰支群 えいしょうじしぐん 永松寺支群 あまがさわどだん 尼ヶ沢土壇	古墳	古墳	前方後方墳 1		土師器			

写 真 图 版



pl.1 陣が峰地区の調査



陣が峰地区・永松寺地区遠景



J-1号墳全景（南より）

pl.2 陣が峰地区の調査



J-1号墳削平部（北より）



J-1号墳主体部（南より）



pl.3 陣が峰地区の調査



j トレンチ (東より)



i トレンチ (南より)



f トレンチ (南より)



pl.4 陣が峰地区の調査



c トレンチ (北より)



k・g トレンチ (東より)



m トレンチ (南より)

pl.5 陣が峰地区の調査



d トレンチ (南より)



d トレンチ  
遺物出土状況



e トレンチ (東より)

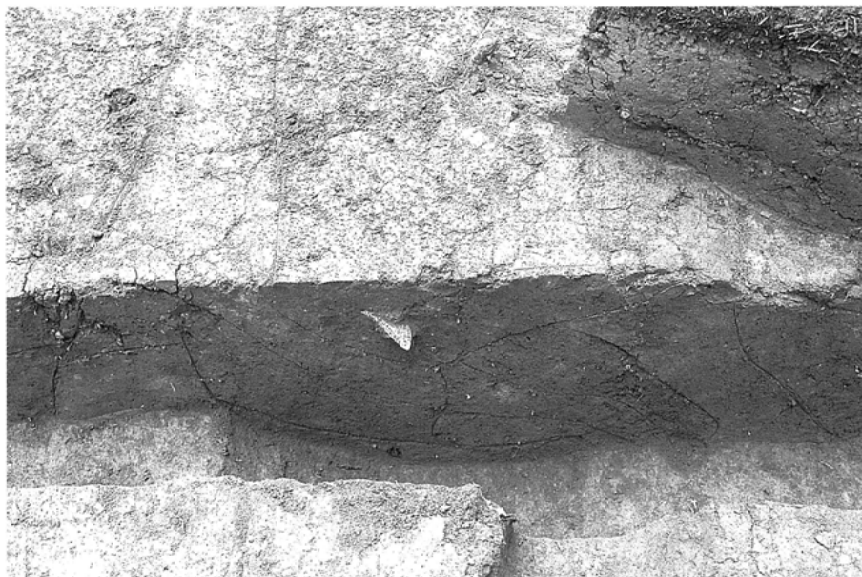
pl. 6 陣が峰地区の調査



J-1 墳頂部  
遺物出土状況①



J-1 墳頂部  
遺物出土状況②



J-1 1号主体部  
(南より)



pl.7 陣が峰地区の調査



J-1 2号主体部  
(南より)



J-1 3号主体部  
(南より)



J-1 墳頂部  
東側盛土 (南より)

pl.8 陣が峰地区の調査



a トレンチ南側（東より）



a トレンチ北側（東より）



b トレンチ（東より）



E-8号墳全景（北より）

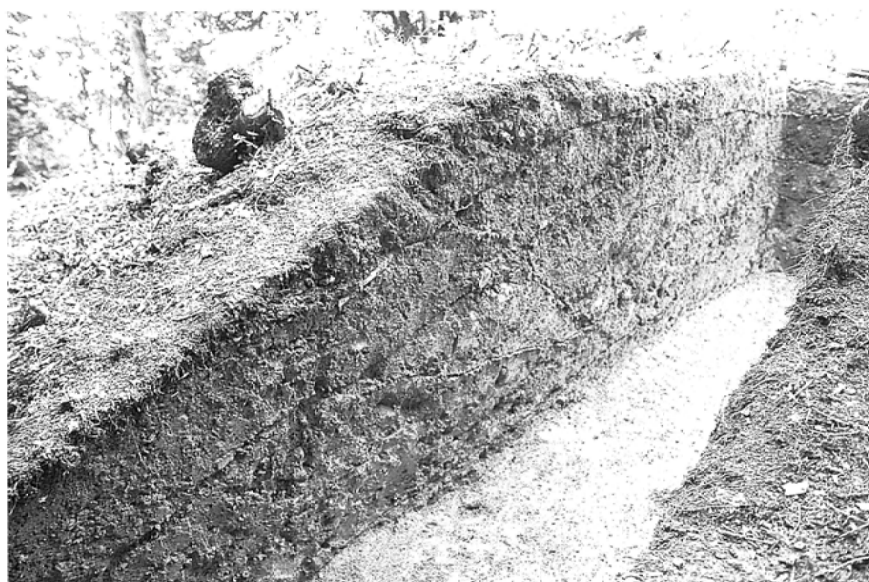


E-8号墳北側（西より）





E-8 南側 (西より)



E-8 西トレンチ①  
(西より)



E-8 西トレンチ②  
(西より)





E-8 東トレンチ(東より)



E-5 東トレンチ(南より)



E-6 東トレンチ(南より)



E-6 西トレンチ(南より)



E-7 東トレンチ(南より)



E-7 北トレンチ(東より)